

第七章 記録選択以外の獅子舞番楽の現況

第一節 活動及び休止・消滅の獅子舞番楽一覧表

凡例

①本表は、本調査事業時に伝承を確認した、由利本荘市及びにかほ市の記録選択以外の獅子舞番楽の現況調査の結果をまとめたものである。表1は活動中、表2は休止・消滅の獅子舞番楽を示す。なお、本調査においては、番楽がすでに休止・消滅状況であっても、獅子舞に関わる行事を行っているものは活動中とした。

②本表は、本事業の調査委員、調査員、特別調査員が現地調査により作成した調査カードに基づき作成した。このうち調査の対象者が不明であった箇所については調査不能とし、過去の文献があるものはそれに拠った。引用文献は備考欄に示した。

③一覧表の空欄は、調査時に不明であったことを示す。なお、「不明」と記載のあるものは、調査カードに基づくものである。

④表1及び表2の左端の列に示した番号は、本節図1の番号に対応する。

⑤法量を示した獅子頭の計測箇所は、④正面下顎横幅⑥高さ⑦下顎から鼻までの高さ⑧奥行き⑨眉間から鼻の長さ、である。また、獅子頭の頭頂部の記載があるもののうち、「その他」は鏡・宝珠・角以外のものをさす。

⑥本表のうち、由利本荘市の特筆するべき団体を本章第二節、第三節、第五節で、またにかほ市の休止・消滅の団体を本章第四節で詳述した。本節図2は、現地調査及び文献により獅子舞番楽の伝承時期または伝播を示すことができたものをまとめたものである。なお、本図は聞き取り等による伝承を含むものであることをおこわりしておく。

図2参考文献・益子清孝「獅子頭集団とその村落社会構造」日本地理学会一九八二年度秋田例会一般研究発表レジュメ、『本荘の民俗芸能とまつり』本荘市教育委員会、一九九五。『本海獅子舞番楽』鳥海町教育委員会、二〇〇〇年。

表2及び図1の調査番号対応一覧

No.	地域	名称
1	本荘	船岡獅子舞
2	本荘	長者屋敷獅子舞
3	本荘	南ノ股番楽
4	本荘	横山獅子舞
5	本荘	北ノ股獅子舞
6	本荘	鮎瀬獅子舞
7	矢島	荒沢獅子舞
8	矢島	行平(貝喰・十二ヶ沢)獅子舞
9	矢島	中山獅子舞
10	矢島	高橋家の獅子
11	矢島	佐藤家の獅子
12	矢島	田濃神社(正源坊)の獅子
13	矢島	新所の祝い獅子
14	矢島	須郷田獅子舞
15	矢島	矢越獅子舞
16	岩城	下黒川獅子舞
17	岩城	君ヶ野餅搦き舞
18	由利	蟹沢獅子舞
19	由利	曲沢獅子舞
20	大内	中館獅子舞
21	大内	深沢獅子舞
22	大内	中帳獅子舞
23	大内	川口獅子舞
24	大内	長坂獅子舞
25	大内	滝番楽
26	由利	沼番楽
27	西目	中沢番楽
28	西目	田高神楽
29	鳥海	村木獅子舞
30	鳥海	檜連獅子舞
31	鳥海	間木ノ平獅子舞
32	鳥海	小川獅子舞
33	鳥海	多宝院(合掌寺)の獅子
34	鳥海	野宅獅子舞
35	鳥海	上杉沢獅子舞(番楽)
36	鳥海	赤倉獅子舞
37	鳥海	福島獅子舞
38	鳥海	皿川番楽
39	象潟	本海流水岡野獅子舞
40	象潟	大須郷獅子舞
41	象潟	本郷獅子舞番楽
42	仁賀保	上小国番楽
43	仁賀保	畑番楽

表1及び図1の調査番号対応一覧

No.	地域	名称
1	本荘	柴野獅子舞
2	本荘	畑谷獅子舞
3	本荘	山田獅子舞
4	本荘	赤田獅子舞
5	本荘	福田獅子舞
6	本荘	土谷獅子舞
7	本荘	谷地獅子舞
8	本荘	埋田獅子舞
9	本荘	大築獅子舞
10	本荘	鳥川獅子舞
11	本荘	鳥田目番楽
12	本荘	雪車町番楽
13	本荘	川口獅子舞
14	本荘	大沢獅子舞
15	本荘	二十六木獅子舞
16	本荘	上万願寺神楽
17	矢島	沢内獅子舞
18	矢島	砂子沢獅子舞
19	矢島	杉沢獅子舞
20	矢島	新荘「弥勒神社」獅子神楽回り
21	矢島	津雲神社(大川原)の獅子振り
22	岩城	月山神社獅子舞
23	岩城	上蛇田獅子舞
24	岩城	滝保御獅子廻し
25	由利	新上条獅子舞
26	由利	町村獅子舞
27	由利	沢口獅子舞
28	由利	新屋敷獅子舞
29	由利	黒沢獅子舞
30	大内	岩谷町獅子舞
31	大内	新沢八幡神社獅子舞
32	大内	大倉沢獅子舞
33	大内	岩谷籠獅子舞
34	大内	葛岡獅子舞
35	大内	高尾山金峰神社御獅子
36	大内	三川獅子舞
37	東由利	舟打場獅子舞
38	東由利	地下ノ沢番楽
39	東由利	種沢獅子舞
40	東由利	大琴獅子舞
41	東由利	黒瀬獅子舞
42	東由利	新田獅子舞
43	東由利	本宮獅子舞
44	鳥海	貝沢からうすからみ
45	鳥海	鏡ヶ平獅子舞

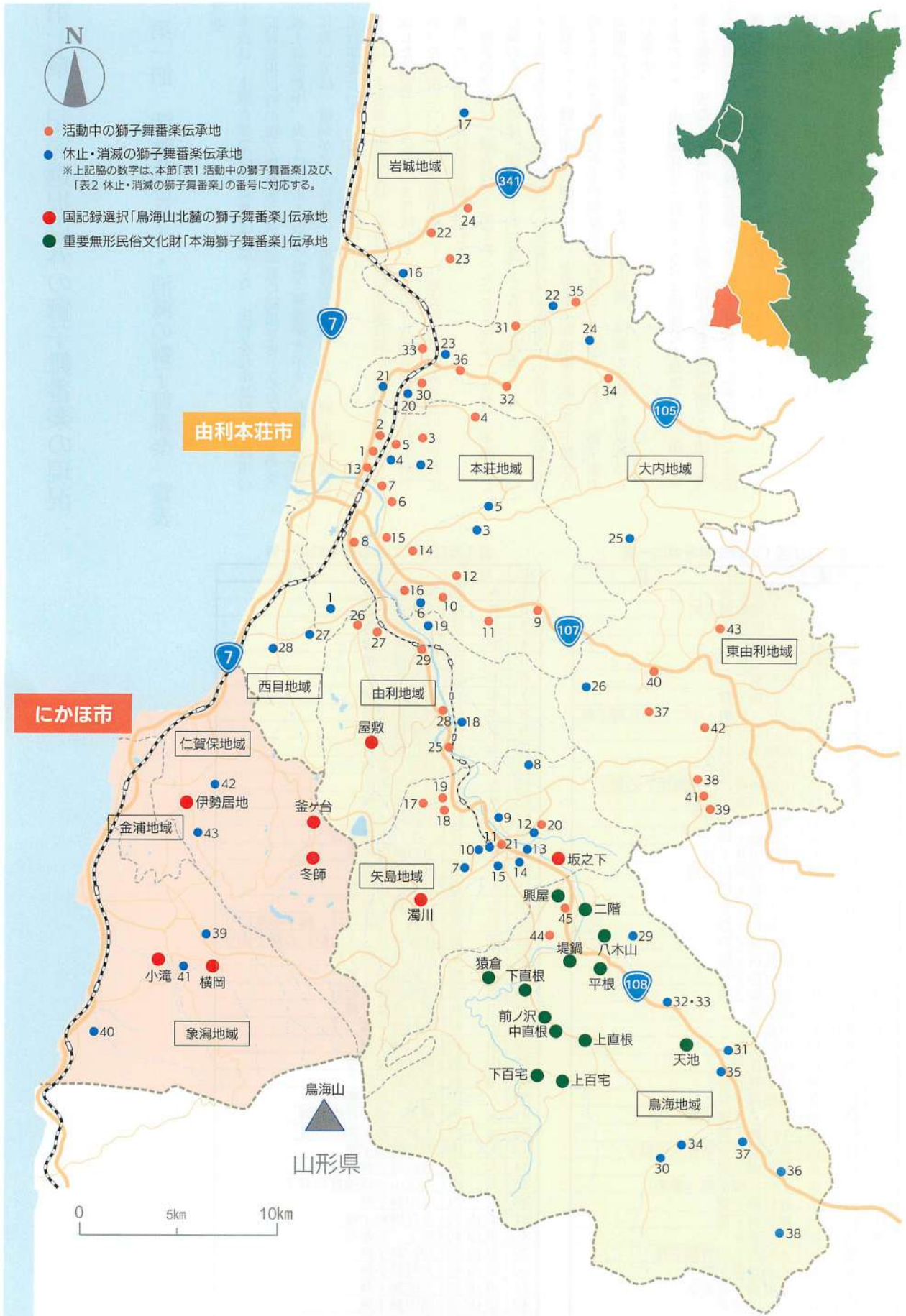


図1 活動中及び休止・消滅の獅子舞番楽伝承地位置図

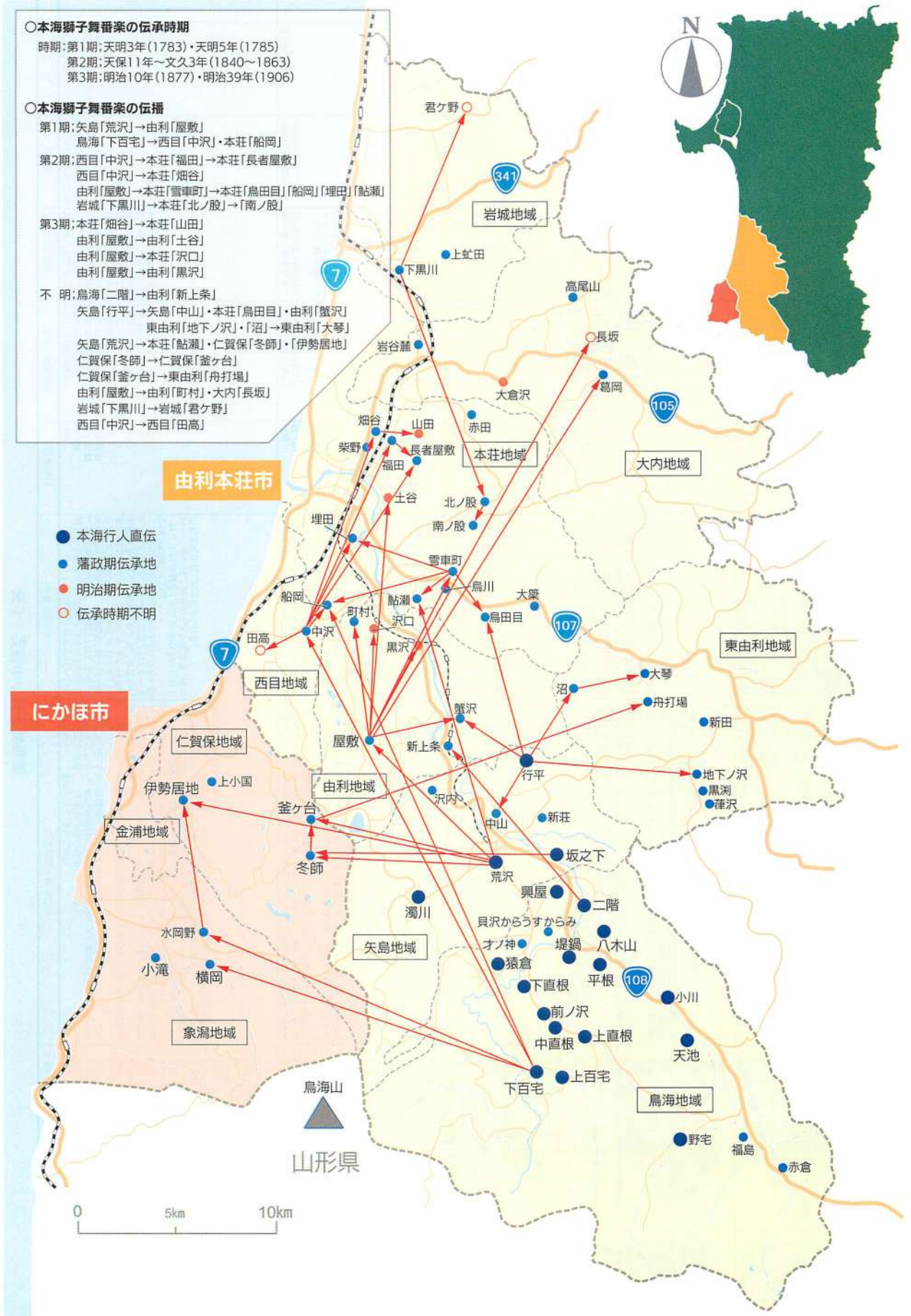


図2 本海獅子舞番楽伝承時期・伝承図

第二節 由利本荘市域の活動中の獅子舞番楽

柴野獅子舞（由利本荘市川口字柴野）

由来 明治九年（一八七六）に川口村と合併した集落で、農村地区であったが近年病院が建設され、都市化して戸数も三倍程になっている。柴野獅子舞は村の若衆が村内の悪魔祓いを行うため、安永二年（一七七三）に是山和尚（一七二四〜一八一）に獅子頭の制作をお願いしたのが始まりで、翌年完成したと伝えられる。しかし、舞は本間金藏氏（現当主は明氏）が上川大内大小屋（旧大内町）の浅之助氏から三年間学び、村内の若衆に伝授したと言われる。柴野獅子舞のように獅子頭が是山和尚の制作としている講中には、大倉沢・岩谷町・深沢・高尾の獅子舞などがあり、是山信仰の厚さを物語っている。また、柴野獅子は赤田獅子と兄弟獅子（夫婦獅子とも言われる）であると伝えられている。

獅子舞に関する行事 是山和尚から獅子に性を入れて頂いた時に、「獅子は荒神であり不浄を嫌うから死忌・産忌などのある家には決して入るな。また、毎年正月二十八日には当寺の大般若会があるので獅子を参会させるように」と言われ、また大仏殿が完成した際には「大仏の祭礼には必ず参列するように」と言われたことから、赤田獅子舞と同様に二月十一日の寺の大般若祈祷会で獅子舞を奉納し、八月二十二日の赤田大仏祭りにも参列して大仏等に獅子舞を奉納している。これら行事に出かける時は必ず近くの大日靈神社へ神舞を奉納してから出かけている。このほか、悪魔祓いと称して一月の三日曜とお盆の八月十四日に町内各家々を門付けして歩く。一月の獅子開きと農作業後の獅子納めは獅子宿の本間家で開催している。

獅子舞の形態 獅子舞は神舞と奉納獅子の二つの構成からなるが、必ず神

舞から始まり、次のような順で舞う。

- ① 獅子振りと称し、獅子が舞う場を清める露払いの舞で、獅子頭を高く掲げ、四方固めしながら舞うのを基本としている。
- ② 素舞は立って素手で両手を大きく振って激しく舞う。途中、足で梵字を書く所作もあるが、最後は両手で神（仏）に祈るような仕草で終わる。
- ③ 扇の舞は扇を手に持って左右に持ち替え、回って扇を上に掲げ、裏表にしながら舞う。
- ④ 剣の舞は最初に素手で舞い、腰に差していた刀を抜いて鞘のまま舞ってから鞘から刀を抜き、右手に刀、左手に鞘を持ちながら前後左右に激しい動きで回し、終わりに刀を鞘に収める。
- ⑤ 禪の舞は禪の両端を持って前後左右に振って舞い、最後に禪の上を飛び越えるようにして舞は終わる。獅子舞は舞手と後方の幕採りの二人で舞う。最初は獅子頭を低い位置から高く突き上げ、左右に振りながら幕をくぐる所作や歯打ちを繰り返し、さらに舞手の頭上へ高くかざして歯打ちをする。このような獅子頭を振り、歯打ちする所作を何度か繰り返し、幕採りが舞手の身体に獅子幕を巻き付け、元に戻す所作と太鼓の音に合わせた歯打ちが繰り返される。最後はゆっくりとした調子とともに獅子頭を正面に向けて歯打ちをして終わる。

獅子頭・道具・文書等 是山和尚が造ったと伝えられる獅子頭は「御獅子様」と称され、本間家が宿となっている。頭頂部には小さな宝珠があり、胴幕は藍の生地に水玉模様である。張幕も藍に水玉と唐獅子模様。剣先は約二m程の長さで先端が



剣に作られ、長い麻糸や御札等が結び付けられている。番楽はかつては二六演目演じていたと伝えられるが、現在は一人、四人餅搗の二演目のみである。古い文書類はないが、本間金之助氏が口伝した言立を会員が書き留めた資料が残っている。

(註)

(1) 『本荘の民俗芸能と祭り』本荘市教育委員会、一九九五年、183頁。

(須田 高)

赤田獅子舞 (由利本荘市赤田)

由来 旧岩城藩領内で大内地域と隣接する赤田地区に正法山長谷寺を創建した是山泰覚和尚が獅子舞を伝えたとされる。是山和尚は禅宗の僧でありながら父が信仰していた羽黒修験の影響を受け、加持祈祷を盛んに行つて地元の人のみならず、藩主や北前船の船問屋等からも厚い信仰や信頼を得ていた。このようなことから、赤田地区周辺に獅子舞を中心に民俗芸能が広く分布している。長谷寺の境内には大仏殿が建立され、中に高さ八m余の大きな十一面観音像がある。大仏は天明六年(一七八六)に建立されたが、明治二十一年(一八八八)に焼失し、二十五年に再建された。この大仏の祭りを「赤田大仏祭り」と称し、神仏混淆の祭りで県無形民俗文化財に指定されている。祭りは是山和尚が始めたとき、和尚と関わりのある多くの獅子舞等が参加している。

獅子舞に関する行事 赤田獅子舞は是山和尚と関わりのある民俗芸能の中で最も重要な獅子舞であることから寺の行事や他集落の祭り等に招かれ、年間一〇回程演じている。主な行事として、二月十一日の長谷寺大般若祈祷会があり、この日は兄弟獅子と伝えられる柴野獅子舞と共に寺の祭壇の前で

神舞と獅子舞を奉納する。八月十四・十五日は赤田地区の各家々の門廻りをして歩く。そして、八月二十一・二十二日は最大の行事である「赤田大仏祭り」が執り行われる。二十一日は長谷寺から約二km先の神明社の大祭であるが、例祭が終わる午後三時頃、長谷寺から大仏の御正体(小観音像)を乗せた神輿が神明社へ向かい、神明社に到着すると御正体は不動尊前へ安置されて一泊する。

翌日は午後一時頃に礼装姿の氏子たちが神明社に集合し、長谷寺の住職が神明社へ迎えに来ると行列の順序と役割が読み上げられ、法螺貝の合図で行列は出発する。この行列に是山和尚と関わりのある民俗芸能が参列する。先頭の①赤田獅子舞から②柴野獅子舞③平岡獅子踊り④山田獅子舞⑤岩谷町獅子舞⑥北福田シャギリ⑦赤田シャギリと七つの講中であるが、かつては福田獅子舞・大倉沢獅子舞・高尾獅子舞・中館獅子舞・深沢獅子舞・萱ヶ沢番楽(旧雄和町)なども参加していた。

各講中は橋の袂や道路の変更など境界に差し掛かる時に、その都度舞い、寺の境内に入ると大仏殿を時計回りに三回まわり、正面に来るたびに大仏に舞を奉納して行く。境内全体が様々な芸能のリズムに包まれ、響き合う。神輿は大仏殿に入り、正味体が元に納められる。大仏への舞の奉納が終わると、参加した講中は寺の本堂で直会をする。幕納めは十一月第二土曜日に二又公民館で集落の人々を前にして舞う。獅子舞の形態 赤田獅子舞は獅子振りから始まり、素舞・扇の舞・剣の舞・禪の舞と続く「神舞」



と奉納獅子の「獅子舞」を演じるのが基本である。舞のリズムは比較的早いテンポであり、『秋田県の民俗芸能』の中で「特に本荘由利地区は本海流といわれる獅子番楽を中心に、是山和尚が伝えたという是山系獅子番楽がある」^{〔1〕}と記されているが、舞の芸態は本海番楽とほとんど同様である。番楽も現在は、①武士舞②山ノ神③屋島④四人餅搗⑤羅生門⑥敦盛の六演目程演じることが出来る。

獅子頭・道具・文書等 獅子頭の頭頂部には宝珠があり、髪の毛は麻で胴幕は唐草模様である。獅子頭を「権現様」と称し、赤田大滝の八大龍大権現からは山和尚が名付けたとされる。道具類は武士面ほか八つの面と錫杖・兜・鎧・刀などがあり、文書類は写本の言立のみである。

(註)

(1) 『秋田県の民俗芸能』秋田県教育委員会、一九九三年、90頁。

(須田 高)

福田獅子舞 (由利本荘市福山字福田)

由来 福田獅子舞の由緒は不明だが、福田獅子舞には年代未詳の『本海流獅子舞秘伝之大事』という巻物が残されており、内容を見ると本海流獅子舞番楽の百宅から伝授が行われたものと考えられる。

行事次第 かつては正月十五日とお盆八月十四日に家々廻りを行っていたが、現在は二十十日の日(九月第一日曜日を当てている)に地元(豊受神社)で獅子舞を奉納するだけとなっている。かつての家々廻りでは集落内を上から下に向かってすべての家を廻っていた。家々廻りでは座敷に上がり、神棚に向かって舞う。神棚の前には獅子への供え物として米、神酒、水などが供えられ、金封に入った初穂が用意されていた。初穂は一封の場合は

獅子は家人の頭を噛まず、二封置いてあった場合は頭を噛んだという。家々廻りは午後二時頃から始めたが、一軒づつ直会があったため、なかなか先に進まず、最後に訪れる別当家にたどり着くのは遅い時刻になったものだという話が聞かれた。かつての家々廻りはこのように盛大に行われていたが、次第に人数が減り、家々廻りを行うことが難しくなり、取りやめとなってしまった。また、福田獅子舞には番楽面も残されており、昭和五十年代まではお盆の時に神社の境内に舞台を設けて番楽を舞っていたという。その後、境内で引き続き盆踊りが行われた。



獅子舞の形態 現在の獅子舞は二十十日の日に豊受神社拜殿で午後二時から行われる。この日は神職による祭典もなく、区長に合わせて神前に一礼した後、獅子舞が始まり、舞手が幕を潜った後、すぐに獅子の歯打ちとなり、その後、参列者の頭を噛んで廻り、獅子舞が終わる。

獅子頭・文書等 福田獅子舞には現在、獅子舞で使われているもの他に獅子頭が二つ残されている。そのうちのひとつは大柄で御頭舞のものとも考えられる。文書類としては前述の『本海流獅子舞秘伝之大事』という巻物が残されている。これは本海流獅子舞番楽に伝わっているものと共通する内容で、奥付に百宅村から伝えられた旨が記されているが、その年代については記されていない。

(神田竜浩)

土谷獅子舞 (由利本荘市土谷字土屋地区)

由来 保存会が所蔵する『本海流獅子舞秘伝』によれば、明治十年(一八

七七)に屋敷村(現・由利本荘市屋敷集落(旧由利町))の佐藤平右工門によって土谷村若者中に伝えられたとされる。

行事次第 かつては正月や一月十一日の蔵開きの際にも行っていたが、現在はお盆のみ。土谷と谷地はともに白山神社の氏子で、かつては神社でも獅子舞を奉納していたという。現在は、八月十五日に集落内で門獅子を行う。当日は午後二時に公民館を出発する。一軒目は毎年同じ家だが、二件目以降は集落の上から下へ向かって順番に廻る。かつては宿となる佐々木家が最後となり、その後直会となったが、現在は最後に公民館で舞っている。獅子頭はかつては斎藤家が宿とされていたが、ある時、獅子頭が飛び上がり、佐々木家に移ったため、それ以後、佐々木家が宿となったという言い伝えがある。

獅子舞の形態 平成二十八年八月十五日の調査では、子供二名を含む若者七名が、剣先を先頭に獅子、太鼓、鉦という順で廻っていた。家に着くと剣先を持つ者は玄関を背にして獅子に向かい合う形で獅子を舞わせる。一行の中に太鼓や鉦もいるが、テープに合わせて舞っていた。このテープは屋敷番楽のものだという。獅子舞は一度尾を潜った後に幕をかぶり、縦、横に向かつて歯打ちをし、次に歯打ちをしながら時計回りに一周し、最後に正面で歯打ちをする。門獅子には長いものと短いものの二種類があるがいずれも玄関先で舞い、座敷には上がらない。かつては宿では長い舞を行ったというが、現在は短い舞だけとなっている。門獅子を前述のようにテープの音に合わせて舞っており、お囃子の伝承は途切れている。道具類は残されているが舞の伝承は残されておらず、獅子舞を伝承するのみとなっている。このように現在ではテープを使用しながらも続けられているが、それでも獅子舞を迎える家が獅子舞が来るのを心



待ちにしているという状況があり、このような獅子舞を受け入れて、心待ちにする集落の意識が、獅子舞存続に与える影響は大きいと思われる。

獅子頭・道具類・文書等 「明治廿年旧九月」の銘がある獅子頭のほか、番楽面一〇点、番楽幕、道具類が残されており、かつては番楽が演じられていたものと思われる。文書類としては明治十年の巻物『本海流獅子舞秘伝之大事』が伝わっており、奥付に「秋田県由利郡屋敷村 佐藤平右工門 明治十丑八月 土谷村若者中」と記されている。

(神田竜浩)

砂子沢獅子舞(由利本荘市矢島砂子沢)

由来 集落内にある祥雲寺の本寺である大雄山祥雲寺は、もともと川辺郷笹山館にあり、薬師瑠璃光如来を本尊として祀っていた。元禄九年(一六九六)、本寺にあった聖観音を砂子沢の祥雲寺に祀るようになり、この聖観音を祀るために獅子頭を作ったと伝えられているが、記録などは残っていない。

組織・保存会 以前は四二歳までの男性たちで行事を行っていたが、今は若い人がいないので集落で行っている。長男次男の区別はなく、男性であれば門獅子を行った。

獅子舞に関する行事

門獅子 砂子沢集落は現在一九軒あり、現在も一月十五日と八月十三日に門獅子を行っている。集落の高い所にある家から下の方の駅方面にむかつて、一軒ずつまわる。「聖観世音 悪魔祓い」と言いながら各家へ行き、玄関先で獅子の歯を打ったり、家の人の頭を噛んだりした。前年亡くなった人がいる家はまわらないが、子どもの生まれた家はまわる。獅子頭を持つ役(一人)、初穂をもらう役、笛、太鼓、鉦を演奏する役が必要だったが、笛を吹く人がいなくなり、人も少なくなつて平成二十七年頃に若者たちで実施でき

なくなつた。そのため、集落を上と下の二つに分け、門獅子の当番や集落の祭りの当番などを皆で交代しながら行っている（ただし若い人には積極的に出てもらう）。

柱がらみ 以前は新築の家で行つた話も聞いたが、覚えている人はいない。

集落の祭り 元旦と四月十六日（現在は四月第二日曜日）の聖観世音の祭礼の日、八月十八日の宵宮には、聖観世音像の隣に獅子頭を置き、皆でお参りをする。

獅子頭ならびに獅子舞に関する道具・文書等 砂子沢の獅子頭は大きな目と、上唇が厚く作られている。耳はつけ耳で、ぴんと立っており、髪は麻糸でつけられている。その他、太鼓と太鼓のバチ、手平鉦が残されている。

（丸谷仁美）



月山神社獅子舞（由利本荘市岩城富田）

由来 神社が火災に遭つたため、古文書の類は残っていないが、月山神社拜殿に掛けられた扁額（昭和五十年製作）に、坂上田村麿呂に打たれた賊の後世へのタタリを恐れ、その首級を獅子頭として祀り、大同年間より月山神社の祭典に払清め、五穀豊穰等を祈願して、権現講が氏子の家々を舞い廻つたと記されている。

獅子舞に関する行事 月山神社を一般的に「権現様」と呼んでいるところから、保存会を富田権現講という。月山神社例祭はもとは旧暦三月十五日だった。月山神社ということで例祭は満月の日であった。現在は四月第四土曜日に宵祭、日曜日に本祭を行う。獅子頭は四月初めに神社から富田会館に

「お下がり」して、宵宮まで会館で練習を行う。宵祭は午後一時頃会館を出て、富田三三戸の「門廻り」をはじめめる。獅子舞は一軒一軒、奥座敷に上つて「地舞」「獅子舞」を行う。地舞はシデ（垂）の舞、扇の舞、剣の舞から成り、それぞれ採物（持ち物）を替えて舞う。家々を廻る道中では「静ヶ節」が歌われる。「静ヶ節」は地舞の前に歌うこともある。不幸があつた家には寄らない。午後七時頃、囃子を奏しながら神社に上つて、拜殿で宵祭の獅子舞をする。一時間ほどで宵祭が終わり、その後会館まで囃子は奏さずに獅子頭を持ってお下がりをする。本祭は午前八時頃会館を出発して、残りの家々を回る。その後十一時頃から神社で本祭の獅子舞を行ない、本祭は午後一時頃に終了する。

獅子頭 隠居獅子、現役獅子の二頭がある。隠居獅子の材はケヤキ。鼻は丸みを帯び大きく、口中の心棒の中央部は擦り減っている。頬の部分的に亀裂があり、月山神社が火災に遭つた時に外に投げ出して割れたといわれている。昭和二十六年に現役獅子が作られるまで、長年使ってきた古い獅子頭のようにみられる。現役獅子は、口中に「彫刻師 由利郡亀田町 伊藤時治 竣工昭和二十六年九月」とある。材はスギのバッコ（根っこ）。髪の毛は麻を朱色に染めている。隠居獅子も色褪せているがもとは朱色だったとみられる。

獅子舞の神歌 二本ある扇の一つに「静ヶ節」「地舞」「獅子舞」の三種の歌が墨で記されている。歌の内容は次の通りである。

「静ヶ節」

こ、はどこ、こ、は出雲の雲の下、雲の下、雲足早く、国を照らそしや
 ・打てば鳴る、打たねば鳴らぬこの太鼓、この太鼓、調べの糸や
 ・国々に、蒔くべきものはそばの種、そばの種、花良く咲いて、御門成るものや
 ・春は花、夏は橘、秋は菊、秋は菊、や



獅子頭（隠居）



獅子頭（現役）

「地舞」

- ・ じでの柄と、四方社を拝むれば、いかなる神も受けて喜ぶ、受けて喜ぶ ヤ
- ・ 扇の柄と、長い心の目出度さや、唄えば開く天の岩戸に、天の岩戸にや
- ・ 毘沙門堂、左脇差、千の剣を抜いてもようし、かつでもようし、差えでも良しや

「獅子舞」

- ・ 払いくる御幣のかぎりど、はらむれば、悪魔も神もようし、さえでも申し、さえでもようしや
- ・ 獅子の子は、生まれ落ちると頭ふる、頭も髪も祝なるもの、祝なるものや

(高山 茂)

新上条獅子舞（由利本荘市新上条字新上条）

由来 新上条獅子舞は本海獅子舞番楽二階講中の流れをくむといわれており、大久保村の大久保孫市（佐藤とも名乗った）が元文三年（一七三八）に矢島町沢内集落から獅子舞を学んだとされる。

組織・保存会 以前は集落の男性は、学校を卒業すると獅子舞連中に加わった。昭和五十二〜五十三年頃に現在の新上条獅子舞保存会が組織された。獅子舞に関する行事

ケドわたりと悪魔祓い 現在は四月第二土曜日にケドわたり（獅子頭を持って集落を回る行事）と悪魔祓い（各家に行つて獅子舞を舞う）のみ行われている。悪魔祓いは四月第二土曜日に行われる稲荷神社祭典の日、昼の十二時頃から集落をまわる。ヤリとよばれる長い棒が先頭になって各家を祓い、その後、獅子頭、太鼓、笛、手平鉦が続く。道中を歩く時はケドわたり、各家の玄関前で悪魔祓いの舞を行う。この行事はお産のあつた家にはまわるが、亡くなった人がいる家にはまわらない。また、以前は大人だけで獅子舞を行っていたが、十年程前から、子どもも神輿と一緒に集落をまわるようになった。二〇一六年からは獅子舞を若者たちに伝える活動を積極的に行っている。以前は各家で、やさぎ獅子と言う、おどけた舞を舞っていたが、現在は舞い手がなくなったために行っていない。現在は笛を吹く人がいないため、笛の音楽テープを使っている。

獅子舞舞いおさめ 新上条で獅子舞が盛んだつたのは、大正八〜九年頃から昭和十二、三年頃であつた。この頃は暖かくなると練習をはじめ、毎年十二月十六日に幕おさめを行った。幕おさめの時には獅子舞の師匠の家に集まり、獅子舞などを舞つたという。幕おさめは昭和五十三年頃まで行っていたが、現在は行われていない。

獅子頭ならびに獅子舞に関する道具・文書等 新上条集落の獅子頭は頭頂に鏡をつけ、耳は垂れたつけ耳で、紐で縛られている。髪は布を細く切つたものがつけられており、獅子の髪をもらうと子供が健康になるといわれている。歯打ちを行うため、特に下歯が摩耗している。その他、番楽面が四面と太鼓や笛、手平鉦、刀や傘などの道具類が残されている。言立本は昭和二十六年八月の写本が一冊あり、三三もの演目が書かれている。詳細につい

ては昭和四十二年に刊行された『由利町史 資料編第三集』に詳しい。なお、演目の詳細は次の通りである。

先番楽、地堅、翁、三番叟、那須与一、ねんじ若子、可笑、伊賀、敦盛、熊谷、信夫太郎、夜討曾我、舟弁慶、鈴木三郎、切合、千歳、松迎、地神舞、小弓の舞、三人立、木曾、今田八郎、重安、鐘巻、橋引、あかまひ、機織、機織沙門、蕨折、そつそく、天女、桜子、岩戸開。

(参考文献)

『由利町史』一九六七年、30頁〜32頁。

新沢八幡神社獅子舞 (由利本荘市新沢)

由来 新沢の伊藤昭一家の天保十四年(一八四三)九月の記録には、伊藤権左工門、倅の丑蔵が亀田の殿様、岩城隆喜候の前で獅子舞や物真似芸を披露したことが記されているというから、新沢での獅子舞番楽の定着は天保以前となろう。亀田の殿様が新沢に來たという伝承もある。戦後は八幡神社境内の神明社の前に仮設舞台を作つて番楽を行つていた。

獅子舞に関する行事 正月元旦の「初舞」。午前0時になるとともに「神舞」を舞い、午前一時までに初詣に來た人々に一人一人獅子でお祓いをする。八月十四日に門廻しを行う。午前九時、「神舞」を舞つて、神社を出発し、劍先を先頭に獅子四頭、「神舞」の舞手などが続き、太鼓、鉦を鳴らしながら、集落の上から新沢九二戸を回つて歩く。劍先は保存会長(場合によっては講



(丸谷仁美)

員)が持つ。ほとんどの家では玄関先で劍先と獅子でお祓いをするだけであるが、希望した家では座敷に上がつて「神舞」とお祓いを行う。不幸のあつた家は避ける。座敷に上がると、獅子を置く場所(床の間の前)を劍先で祓い、そこに獅子頭四頭を置き、近くに劍先を立てかける。その獅子頭の前で「神舞」を舞い、終了後居間に座つた家族を劍先と獅子頭で祓う。門廻しは、以前は八月十四、十五日の二日間行つた。新沢八幡神社例大祭は、九月十五日に近い土、日曜日。宵宮の土曜日、十八時に神事があり、神事の中で「神舞」を舞う。獅子舞の形態 獅子舞(振り獅子)のほうは伝えていない。「神舞」の舞手はまず獅子頭の前に扇と錫杖を交差させて置き、獅子頭に向かつて座して拝礼する。太鼓と鉦はその後方に位置する。笛が中絶していたが、最近復活したという。まず舞手は素手で舞う。両手の人差指と中指を立て、あるいはその指を交差させるなど、印を切る所作が見られる。次に右手に錫杖、左手に扇(つぼめ扇)を採り、錫杖を振りながら舞い、途中で扇を開く。最後は開き扇だけを持つて舞う。鉢巻を外し、座して獅子頭に拝礼して終了。神舞が終わると、劍先と獅子頭で仏壇、家の中を祓い、家族のお祓いをする。

番楽 現在「気方」と「高立」は確実にできる。二〇一六年には「高立」を小学校で上演した。「信夫」「幕揃」「五條之橋」「鐘巻」などは時間をかけて練習すればできるとい



門廻しのお祓い



門廻しの「神舞」

う。「気方」は武士舞の基本となる舞である。

道具・文書 獅子頭は四頭あり、一番獅子、二番獅子…と呼んでいる。二頭の心棒は中央部が摩滅しており、かつて「神舞」のみならず獅子舞もあつたことがうかがわれる。番楽面は尉面・女面・道化面・鬼面があり、鳥甲や武士舞の鎧等もある。言立本は伊藤義則方に二冊ある。一冊には表紙に「昭和七年 獅子舞謡集 八幡神社獅子舞」と墨書がある。もう一冊はペン書きのもの。伊藤義則家は歓喜院、一乗院といった法印様（修験）の家系で、寺号を天照寺といった²⁰。義則氏で七代目、いまは講員の一人として参加しているが、新沢八幡神社の山門は歓喜院の山門だったいわれ、剣先に卍の印が付いていることから、昔は伊藤家が獅子舞番楽に関与していたと思われる。

(註)

(1) 『大内町の獅子舞』大内町教育委員会、一九七九年三月、29～30頁。

(2) 伊藤家資料および佐藤久治『秋田の山伏修験』秋田真宗研究会、一九七三年、316頁。

(高山 茂)

大倉沢獅子舞 (由利本荘市大倉沢)

由来 大倉沢獅子舞は、「医者の家」と呼ばれる家の人男性（明治十四年（昭和三十八年）が、獅子頭を求めてはじめたとされているが、理由等については伝えられていない。獅子舞は昭和二十八年頃まで行われていたが、一時中断し、昭和四十年代頃に復活した。中断する前は、剣の舞などもあったが、現在は神舞と獅子舞のみ伝えられている。

保存会組織 大倉沢では保存会の名称はなく、ただ「獅子舞」と呼んでいる。現在中学生二人を含む一〇人ほどが参加しており、笛を三〜四人、神舞を二人で担当している。

獅子舞に関する行事

獅子舞 八月十四日に集落をまわる行事を「獅子舞」と呼んでいる。獅子舞の練習はこの日の一週間ぐらい前から行う。集落をまわる際は、集落内の五輪沢↓徳沢↓沢の奥というように、時計回りにまわっていく。まずケンサキと呼ばれる長い棒が先に立ち、その後獅子頭、笛、太鼓、手平鉦と続くが、現在は集落内の移動をトラックで行っている。家に入ると、ケンサキを盆棚に置いて場を清めた後神舞を舞い、その後で獅子舞を舞う。獅子舞は初棚の家（昨年亡くなった人のいる家）とお産のあった家には回らない。回ると獅子頭が割れると言われている。

新築の家の柱を噛む行事（名称不明） また、この日、新築の家で「柱を噛んでくれ」と言われれば獅子頭で柱を噛む仕草を行う。この行事は神舞の前に行く。幕おさめを行うかどうかは不明。

獅子頭ならびに獅子舞に関する道具・文書等

獅子頭は頭に鏡を置き、麻糸で髪をつけ、耳はやや小ぶりの立ち耳で、紐で結んであったが、現在は耳が取れた状態になっている。上歯、下歯とも摩耗している。上顎部分に墨書がみられるが、判読は不明である。その他、ケンサキや笛、太鼓、手平鉦や番楽に使用した錫杖などの諸道具が残されている。



獅子頭（耳がない状態）



獅子頭（耳がついた状態）

(丸谷仁美)

岩谷麓獅子舞（由利本荘市岩谷麓）

由来 岩谷麓の山口家は法印様と呼ばれている。母屋は大きなお堂風の建物で、敷地内に小社を祀っている。家屋敷はそのまま残っているが、無住となっている。昭和五十三年に当家の山口丹弥氏が語った山口家の獅子舞の話が『大内町の獅子舞』（大内町教育委員会、一九七九年三月）に掲載されている。山口家は『秋田の山伏修験』に「新山寺」と記されるのが、そうであろう。当時八九歳だった次の山口丹弥氏の談は、まことに貴重である。丹弥氏の父、山口正見（嘉永五年生）には四人の男子があり、長男を除く三人が父の正見に協力して、地元大内をはじめ内越、本荘、浜通り、時には仙北方面を獅子で一年中門祓いをして歩いた。頼まれて入った家ではまず獅子で悪魔祓いをし、父正見が御祈禱を行う。次に「地舞」「祢宜舞」「メ切り」を舞い、時には「這獅子」を行うこともあった。これは明治三十〜四十年代初め頃までのことであつたという。『大内町の獅子舞』は獅子頭について次のように記す。岩谷麓の初代の獅子頭は、明治初年頃に正見の父山口峯尾が彫つたものだったが、昭和二十三年の大火で焼失、その後作つた獅子頭も昭和四十七年に盗難に遭い、その後は毎年のように法印様の獅子頭を借りて門廻しをしている。なお、昔は岩谷麓に「キカタ」をはじめ「鳥舞」「鞍馬」ほか何番かの番楽があつたようである。その後昭和五十八年に現在の獅子頭を作つた。獅子舞に関する行事 元旦の一月一日と、盆の八月十四日には集落一〇二戸全戸の「門祓い」を行う。朝八時に諏訪神社に集合し、獅子頭に胴幕を付ける「ハカマ付け」（獅子の胴幕をハカマという）を行う。ハカマを付ける時と外す時には、太鼓・鉦・笛のいずれかの鳴り物を鳴らす。拜殿で獅子舞（地舞・獅子舞）を舞ってから神社を出発して、道中囃子を奏しながら家々を廻り門祓いを行って歩く。最初は必ず親方の家（内矢伸良家）で獅子舞を行

い、次に町内会長の家で同じように舞つた後、集落の境をケンザキ（剣先）と獅子で祓い、結界をした後、その近くの家から廻りはじめ。家の玄関先で獅子頭を低く構えて歯打ちをし、その後剣先で左右左と祓う。新築、厄年の人の家など希望する家があれば、振り込んで行き、地舞・獅子舞を行う。振り込む家は五、六戸、多い年で一〇戸ほどである。不幸のあつた家では門祓いは剣先のみで行う。午後三時頃、神社に戻り地舞・獅子舞をした後、獅子頭からハカマを外す。八月十六日の諏訪神社例大祭の宵宮には、午後六時頃拜殿で獅子舞を奉納する。

獅子舞の形態 獅子舞は地舞と獅子舞で構成され、必ず地舞から始める。地舞の舞手は腰に刀を差し、次のような順で舞う。①錫杖・扇を置いて、素手で舞う。②錫杖とつぼめ扇を持って舞う。③錫杖と開き扇で舞う。④最後に開き扇を持って一舞舞い、拝して終わる。獅子舞の時、ハカマ（獅子の幕）の後ろを地舞の舞手が持つ。獅子舞は幕を高く掲げ、獅子頭は低い位置で歯打ちをする。次に舞手が幕から出て、門祓いと同様に獅子頭を低く構えて歯打ちをする。獅子頭・道具等 獅子頭は前記したように昭和五十八年製作、唐草模様胴幕も同じ時に作られている。獅子頭は平成二十八年に塗替えている。剣先は木製で長い麻が付く。他に錫杖、扇・刀、太鼓・鉦、衣裳など。



神社での獅子舞



門祓い

(註)

(1) 佐藤久治『秋田の山伏修験』秋田真宗研究会、一九七三年、35頁。

(2) 以上『大内町の獅子舞』大内町教育委員会、一九七九年三月、56～58頁。

(高山 茂)

高尾山金峰神社御獅子 (由利本荘市高尾)

由来 寛政五年(一七九三)に赤田の是山和尚が赤田大堂を建立する時に、高尾蔵王権現(金峰神社)の境内の杉の大木を使った。そしてこの木の根元で丈五尺の権現様と獅子頭を刻んだ。獅子頭は蔵王権現の側のお堂に安置されていたが、天保十五年(一八四四)に大友小左工門家の後ろの山の中腹に蔵王権現の遥拝殿を建てた時に、その側にお獅子堂を建て、獅子をここに安置するようになった。その棟札が残っている。蔵王権現は大友家の氏神だという。一方では、三〇〇年ほど前に岩城から伝わったともいわれている。金峰神社本殿は集落の背後の山の上にある。

獅子舞に関する行事 一月元旦は午前十時から神社(以下遥拝殿のこと)で行う神事の中で獅子舞を行う。一月三日は

獅子開きの日。別当の大友大樹家で獅子舞を舞い、その後神社でも舞って獅子頭を納める。大友家の屋号は「小左工門」(コンゼンメエの家)という。七月第三日曜日の金峰神社例大祭には午前十時からの神事の中で獅子舞を舞う。神職家の巫女舞も舞われる。八月十五日、十六日は盆の門廻しで、高尾四七戸全戸を廻る。十五日朝、大友家に高尾獅子講(通常は獅子講といっている)の人々が集合、獅子舞



門廻しの獅子舞

をした後大友家を出発する。剣先けんざきを持つのは、大友別当家と決まっている。興昌寺(曹洞宗)本堂で獅子舞を行い、次に親方の家(大友林七家)で獅子舞をする。それから集落の上から下へと各戸を廻り、玄関先で剣先と獅子頭で門祓いをする。頼まれた家、新築の家では座敷に上がって獅子舞をする。とくに新築の家では火伏の「柱噛み」の儀礼を行う。翌十六日は別当の大友家で獅子舞を舞った後、昨日の続きの家から廻る。廻り終えたら大友家で獅子舞をして、最後に神社で舞納める。その後大友家で直会となる。



門廻し「柱噛み」

獅子舞の形態 獅子舞は、神舞と獅子舞から構成される。神舞は帯刀の舞手により、最初素手、次に扇と錫杖、最後に扇だけで舞う。素手の舞では指で印形を作る。それから獅子舞に入る。最初、獅子舞は幕を被らないで獅子頭を振り歯打ちをする。幕をくぐって、くぐり返すと幕を被って歯打ちをしながら舞う。次に幕を外し、家族の頭上で獅子頭を振ってお祓いをする。お祓いが終わると、また幕を被り獅子頭を高く掲げて歯打ちして終了。舞手を「獅子振り」といい、後ろで幕を捌く人を「尾つぼ取り」という。神舞と獅子舞の舞手は異なる。新築の家で行う火伏せ(火災防止)の「柱噛み」は剣先と獅子と家主が家の柱を回って、剣先と獅子が柱を祓った後、家主が水に浸したツバキの葉で柱に水を振りまいて行く。

獅子頭・道具等 獅子は幕を噛ませて金峰神社拜殿の獅子の祠に安置されている。髪の毛は麻、胴幕は唐草模様である。剣先は平成八年に新調したもののだが、天保十五年の文字も併記されている。長い麻と「高尾山金峰神社御獅子」という文字が入った幟が付く。錫杖には木の尻の部分に色とりどりの長い布が付く。これは、この地域の錫杖の一般的な形である。他に太鼓・鉦・

刀・扇などがある。

(註)

(1) 以上『大内町の獅子舞』大内町教育委員会、一九七九年三月、24～25頁。

(高山 茂)

舟打場獅子舞 (由利本荘市東由利田代字舟打場)

由来 舟打場は高瀬川上流の田代地域に属している。田代村は中世以来登場するが、舟打場の名が出ることはなく、田代村の一部として包括されてきた小集落である。田代地域は東西共に広い山地があり、狭い谷間に南から石高、田代、畑中、時雨山、下小屋、高戸屋の小集落が並び、西の山中、大吹川沿いに袖山と舟打場がある所だ。舟打場の鎮守は大山祇神社(山ノ神)とされ、この神社を中心として獅子舞がなされている。田代地域では他に獅子舞を伝承する集落はなく、黒淵地域の地下ノ沢獅子舞がみられるだけである。舟打場が伝承する獅子舞の起源や伝承については遺憾ながら全く不明である。しかし、『釜ヶ台御獅子神社代参巡番割帳』(大正九年)が遺されているように、この釜ヶ台(旧仁賀保町)獅子舞から伝えられたものだという口碑は根強い。伝来は全く不明であるが、少なくとも昭和前期では舟打場若者組合という若者講が獅子舞を担ってきたことが『年中行事記録』(昭和十五年)によっても知られる。旧東由利町では鎮守祭礼から公的信仰行事を全て、こうした若者講で取り仕切ることが多く、集落における若者の位置づけを明確にするものである。ここの獅子舞は今でもこの若者組合でおこなわれている。獅子舞に関する行事 舟打場若者組合でおこなわれる獅子舞行事は七月二十五日前後を最初の獅子舞の練習日として獅子開きをおこなう。昭和二十九年の記事によれば、七月二十七日夕刻、神社に集まり練習を始めたことあり、

練習が終わって、芋の一重詰めを持って祝宴を開いていた。この後、三回以上の練習日を設け、大抵は八月十日前で練習は終えた。本番は八月十三日のお盆である。この日、夜七時まで神社に集まり支度して、八時には先ず神社拜殿で一舞を奉納し、次に神社向拝の前で門獅子を舞い出発する。廻る順番は集落の下の方へと向かうものだが、先頭にはボンデン(剣先)が立ち獅子や拍子(囃子)が従う。拍子は太鼓、笛、鉦がつき、次の家に移る道中の拍子を街道下りの拍子が奏でられる。この拍子は五七調の歯切れのよい拍子の唄だといわれてきた。門獅子の巡行は、途中で集落上、中、下の三カ所に立てられているジョウバシラの前でも立ったまま獅子舞を舞うものである。各家での舞は門獅子と呼ばれているものだが、全戸例外なく舞うのだとされる。こうして廻り終えると再び神社にもどる頃は、大抵次の日の朝になることが普通であったという。八月十四日は初棚の家(新盆)で獅子舞をおこなう。これは依頼された場合だけで、恒例というのでもない。今ではこれを十三日におこなう家も多くなった。十四日はまた、林澤寺(田代)で慰霊獅子舞を奉納することもあった。「記録」によれば昭和二十一年からおこなって、初めは戦没者の供養であった。この時は神社から出て先ず住吉(田代)の神明社に参拝をし、林澤寺で獅子舞をしている。林澤寺の供養獅子舞には地下ノ沢でも獅子舞を奉納していたことが「記録」にみえる。帰りは石高(田代)で三軒の家から請われて舞をおこない、袖山(田代)では一軒で舞っていた。そして、再び神社にもどり終わる。この慰霊の獅子舞は継続され、獅子舞関係者の供養のためとしても寺で舞われたらしいが、平成前におこなわれなくなったという。九月十一日は獅子納めの日として、盆と同様に獅子舞をして各家を廻る。この日は集落で祀る石碑や小祠、ジョウバシラの前でも獅子舞が舞われるものである。終わるとこれも次の日の朝方であった。獅子納めでは最後に神社で小豆汁が振る舞われることが恒例であった。これら獅子舞は全て悪魔祓いの意味を持つ、といわれている。

獅子舞の形態 舟打場の獅子拍子は三拍子だとされる。獅子舞には四種があつて、人舞（神舞）・ナヨリ（名寄）・やさぎ獅子・餅搗き獅子、であつた。門獅子は家の玄関先、または御棚を飾っている座敷の外から舞を納める。家人が並んで座る前の座卓に酒や供物、蠟燭などを供えて迎え、獅子舞連中がボンデンで家人を祓つてから獅子舞がおこなわれる。舞いでは、最初獅子を左右前後に振りながら、次に歯打ちをした後、幕を獅子持ちの身体に絡めながら立ち上げ、歯打を繰り返すものだ。これが舞い終わると、家人が頭にひねり銭を置いているので、それを獅子が噛んで飲み込むようにして受け取り、後ずさりをして再び獅子頭を噛み合わせて終わる。家にも上がり込んで舞うのは太鼓の師匠の家と笛の師匠の家のほか、初棚の家でも舞うことがある。この時は人舞とナヨリを舞うことになっていた。餅搗き獅子舞は面を付け襷を掛けてキギ（杵）を持って出て舞うもので、一人餅搗き舞といわれる一種の狂言舞だとされる。やさぎ獅子の舞はほとんど舞われることがないために、今日の伝承が危うい。

獅子頭・道具・文書等 獅子頭は三頭現存する。一番古いものは隠居獅子

といわれ、「享保十一年（一七二六）」「ひのえ年六月」の銘がみられる。少し大振りの頭である。次に古い獅子頭は「明治四拾四年四月二十日」の銘があるもので、一番新しいものは最も小さく軽く造られている。「記録」によれば昭和三十三年七月に「獅子修理塗り」と見えることから、この最後の獅子のことであろう。獅子頭は神社に納めておくものだが、昔は三吉家が獅子別当とされていて、獅子舞には必ずこの家から出たという。他に用具類ではボンテン（剣先）が一点、面は一点しかなくて、可笑面だと思われるものがある。桐材で額に瘤をあしらひ、口を曲げたもので、胡粉と紅殻塗りが施されている。関係文書には、『年中行事記録』（昭和拾五年拾貳月以降）、『釜ヶ台御獅子神社代参巡番割表』（大正九年旧八月八日）、『獅子うた』（年月未詳・昭和末期）などがみられる。『獅子うた』には、かいどうくんだり・かど獅子・

なより・人舞、の四種の文句が記されている。このうち人舞は神舞のことと考えられる。

（齊藤壽胤）

地下ノ沢番楽（由利本荘市黒淵字地下ノ沢）

由来 地下ノ沢は近世初期に生駒氏領となる高瀬川上流に点在する小農村集落の一つである。大字は黒淵郷で、明治には馬や藍の産地として知られていた。獅子舞の発祥起源は、明確な資料の欠如によって定かではない。しかし口碑によれば、文久元年（一八六一）に貧しい旅人から、旧矢島町行平の番楽が伝えられたものという。この文久元年という年号は、現存する番楽幕に「文久元／酉七月吉日／地下ノ沢邑／惣講中」と藍染めに白抜きにされた銘があることをもって裏付ける、としている。行平の獅子舞番楽は立石神社に祀られる獅子頭があつて元文五年（一七四〇）の銘が記されているもので、既にこの頃には伝承されていたとみられる本海流獅子舞の一つであった。行平の立石神社は観石仏二体を御正体として、明暦三年（一六五七）からの争議で「立石山公事」として幕府から裁定が下されたなど、早くから知られる近郊でも信仰の篤い神社であった。この行平の獅子舞が地下ノ沢に伝承されたとするならば、立石神社の観音信仰と大きく関わっているのではないだろうか。行平獅子舞は、地下ノ沢からやや離れている東由利杉森の沼集落や立石中山薬師講中にも伝承されていたというから、口碑という旅人というのは行平の者をいうのではなかったか、と思われる。『東由利町史』（東由利町史編纂委員会編、一九九八年十月）によれば、番楽幕には天保元年（一八三〇）のものがあると記されているが、それは現在見当たらない。もし、天保元年の幕を信じるならば、文久元年より三〇年も遡って獅子舞が存在したことになる。

獅子舞に関する行事 獅子舞はこの地の鎮守として崇めている御嶽神社

の祭礼(八月七日)と盆(八月十四日)に舞われている。いずれも門獅子で、集落内を廻って家々の門々で獅子舞を舞うものである。祭礼の時の門獅子は、自治会館に保管している獅子頭を取り出して、番楽連中が支度を調べて、キャドクダリ(街道下り)「にしま」の拍子で神社に上がってくる。ちょうど神社で祭りが終わる頃、拝殿に上がって舞を奉納する。このときの獅子舞は、「先舞」と「獅子舞」の二番である。次に「にしま」の拍子をつけ、集落に下って家々の門付けをする。一般の家では門獅子という立ったままの一人舞である。氏神を持つ家の場合には、氏神の前で「門獅子」というのを舞っている。場合によっては家々に上がり込み、神棚のある座敷で、「先舞」と「へい獅子」を舞うのである。この門獅子は、集落の道外れでも舞うことになっていて、石碑や小祠があるところでも必ず舞うものだ。門獅子が終わると自治会館に戻り、ここで直会となる。盆の獅子舞もほぼ同じようだが、神社では舞わないもので、それ以外は祭りの時の門獅子と同じ行事となっている。獅子舞の形態 キャドクダリの「にしま」には唄があり、「やあはあ、見えども姿、見えども姿、島の沖の小船、目出度さや目出度さよ」「やあはあ、見えども姿、見えども姿、目出度さよ目出度さよ」というものである。「先舞」というのは一人舞によるもので、最初に扇を採り舞い、次に刀を採って舞う。この拍子は次第に早くなるという。獅子舞の所作では「へい獅子」というのがあり、これは這い獅子のように畳の上を這いながら物を採すかのようにして獅子頭を左右に舞わす。その後、「下がり藤」といって獅子採りが獅子の幕を被り、幕を体に巻き付けるようにした獅子頭を天井に掲げていく作法がある。獅子頭を舞わすときには、獅子採りが笹の葉をリードとした獅子笛を鳴らしながら舞っている。

番楽舞 番楽舞は昭和五十年代初めまでやったというが、今は消滅してしまつた。この地でも番楽舞を含めて獅子舞と称していたもので、番楽舞諸曲

に先立つて必ず獅子舞が舞われるものだからといわれる。だが、この番楽も言立帳記録(昭和六十年八月)によれば「伴楽」と表記されてきた。番楽を演じるには最初に幕開きがなされる。毎年七月末か八月一日頃であった。この日は獅子にお酒を供えて拝み、舞いなどの練習を始める日であった。自治会館のない時代には番楽宿があつて、佐藤善之丞家がこの宿となっていた。やがて本番は八月六日御嶽神社の夜宮の日で、舞台は今の会館の前に臨時に造って舞われた。舞の次第は「式五番」といって、先番楽・鳥舞・翁舞・三番叟・若子舞の順でおこなわれ、その後はいずれでも披露されていく。残されている演目の次第を書いた「めぐり」には式五番の前に、獅子の先舞・獅子舞がみられ、獅子舞は必ず舞われたものであつたことがわかる。その他の演目では、三人太刀・金巻の舞・二人番楽・若子の舞・一人餅搗き舞などもあり、「めぐり」に記録されている。祭礼奉納番楽が終わると、九月一日の二十日風祭りの日に幕納めがあつた。宿に獅子頭を安置してお酒を供えて拝み直会が始まる。宴が酣になると何番かの舞が出た。早拍子のものが多く、三番叟などが舞われ、最後は獅子舞で納めるものだった。なお、昭和二十五年頃までは林澤寺(田代字西ノ沢)でも番楽が舞われたと『東由利町史』に記されているが、詳細については不明。

獅子頭・道具・文書等 昭和六十年八月吉日『伴楽言立帳』一冊、昭和六十年八月吉日『伴楽言立帳』一冊があり、共に番楽の台詞や唄が記されている。昭和六年の『伴楽言立帳』によれば先の番楽演目では披露されなかった、あいづやま・わらび折り・鈴木をんせの舞・新屋柱祭(柱がらみ)獅子舞・御神楽・やさぎ獅子・からうすからみ、それに万歳の言立も載せられているから、古いものは神社拝殿に安置されていてほとんどこれを使って舞うことはない。もう一頭が、以前には番楽宿に保管されていた獅子頭で、今は自治会館に収納しているものである。この獅子頭は平成の初めに塗り直しされたも

のである。獅子の髪は布を裂いて細くしたものを付けているが、目眩や頭痛に治験があるということで一、二本借りられることがあるという。治ると新たに髪を奉納するとされた。地下ノ沢では番楽面が比較的よく遺されていて、一面が現存する。面の名が分かるものは鳥舞、三番叟、若子などで、ほとんどが忘れられてしまっている。用具類もかなり揃って保管されるが、その中に錫杖が大、小二点あり、大きい方には寛永通宝銭が付けられている。

(齊藤壽胤)

第三節 由利本荘市域の休止・消滅の獅子舞番楽

北ノ股獅子舞(由利本荘市北ノ股)

由来 北ノ股獅子舞は伝承によると文久二年(一八六二)、高野五郎左衛門の弟である高野吉三郎儀助が亀田から獅子舞番楽を伝えたとされる。そのため、北ノ股獅子舞は、赤田の獅子舞と同じ三拍子であるという。獅子舞番楽はかつて、かぞえ三〇歳までの男性が入る北ノ股獅子舞連中で行われていたが、昭和二十八年の市町村合併後は北ノ股部落番楽部に引き継がれた。しかしながら三〇年ほど前から、獅子舞番楽を行っていた中心的な人物が亡くなったため、現在は休止状態となっている。

獅子舞に関する行事

悪魔祓い(二月、五月、七月) かつては年に六〜七回、悪魔祓いが行われていた。悪魔祓いは、獅子頭が集落をまわる行事で、ケンと呼ばれる麻糸のついた棒を持つ人を先払いとし、獅子頭を持つ人、オツパ取りという獅子の尻尾を持つ人、太鼓、鉦二人、笛の七人程度で集落(二四軒)を回った。獅子がまわる順は、公民館に移す前に代々獅子頭を預かっていた家と、その

親獅子である獅子頭を持つ家とをはじめにまわり、その後集落の奥から順に上から下の方向にまわった。また、八月十三日から十四日に行われる悪魔祓いでは、獅子ふりを行う。獅子ふりには獅子舞と門獅子とがある。門獅子は獅子の歯を鳴らすだけで、獅子舞は希望する家があれば家に入り、家の柱に向かつて舞った。獅子舞を行うことを「みつがしらをおろす」といった。悪魔祓いにはお産のあつた家と、弔いごとがあつた家は一年間参加できなかった。弔いごとよりお産の方がヒが悪いとされ、ヒの悪い家に行くと獅子が壊れるといわれた。悪魔祓いは決まった日のほか、集落で疫病などが流行った時にも行われたという。

シングウ(新馬)獅子 新築した家で舞う。門獅子と同じ獅子の振り方だが、言立が異なる。①仏壇、②かまど(火床)、③大黒柱、④床の間の順でみつがしらをおろす(獅子舞)。最後に仏壇の前に家族が並び、戸主の頭の上に麻糸を置く。獅子ふりの人が戸主の頭の上の麻糸を獅子頭でくわえ、ケンに結んだ。家族には獅子が頭を噛むしぐさをする。その後、頼まれればその時に出来る舞を行ったという。シングウ獅子は昭和四十四年に行った後は行われていない。

弔い獅子 獅子舞を行っていた人が亡くなると、翌年にその家に行き、舞を奉納した。

幕おさめ 獅子舞番楽の練習期間は七月一日から八月十四日頃までで、幕おさめは二十十日の頃に行ったという。幕おさめはおたのしみ会的一种で、公民館ができる前まで獅子頭を保管していた小松氏宅で行っていたが、後にできた公民館の裏に舞台をかけて行った。

獅子頭ならびに獅子舞に関する道具・文書等 北ノ股集落には二つの獅子頭がある。現在公民館に保管されている獅子頭は頭頂に大きな宝珠をつけ、人毛のような髪、立てた耳が特徴である。親獅子は個人宅で保管されている。この他、番楽面が五面と「明治四年」と墨書のある面箱、道具等が一式保管

北ノ股獅子舞の言立本

明治三十五年言立本	昭和九年言立本	印刷された言立本
晩楽舞	晩楽舞	晩楽舞
式ノ舞	式ノ舞	式ノ舞
三翁	三翁	三翁
鳥舞	鳥舞	鳥舞
しのぶ	翁ノ舞	翁ノ舞
扇的	鳥舞	鳥舞
塩水波	扇的	しのぶ
鈴木	扇的	扇的
機織	塩水波	塩水波
沙門	鈴木	鈴木
高立	高立	高立
山神	山神	山神
曾我	曾我	曾我
金巻	金巻	金巻
鞍馬	鞍馬	鞍馬
岩戸開	岩戸開	岩戸開
五條橋	五條橋	五條橋
矢嶋	矢嶋	矢嶋
蔵折	蔵折	蔵折
若子舞	新禺(ジングウ)	新禺(ジングウ)
病人払い	病人払い	病人払い
弔(トムライ)	弔(トムライ)	弔(トムライ)

されている。言立本は明治三十五年のものと昭和九年のもの、印刷されたものがある。この他、昭和二十年頃までに書かれた、舞の舞い方が記されている記録がある。なお、言立にはないが「四人餅つき舞」も舞われており、一番の人気の演目であったという。

(丸谷仁美)

鮎瀬獅子舞 (由利本荘市鮎瀬)

由来 由利本荘市雪車町(旧本荘市)から獅子舞が伝わったと言われている。雪車町には文久三年に屋敷集落(旧由利町)から獅子舞が伝わったとい

う伝承があるため、鮎瀬(旧本荘市)に伝わったのはこれ以降であろう。集落内にある白山神社には、慶応二年(一八六六)に獅子舞連中が藪(欄)間を寄付した額が残されているため、その頃には鮎瀬に獅子舞が伝わっていたことが分かる。

獅子舞に関する行事 鮎瀬地区では、番楽と言わず、「獅子舞」と言っていた。冬とお盆に舞う機会があり、三番叟からはじめて、一二〜三演目ほど舞ったという。獅子舞は別当の家(屋号:サンペイ)で行った。このほか、正月に悪魔祓いと称して集落内の各家で獅子まわしを行った。鮎瀬集落は八〇軒ほどあり、集落の上から下にまわった。ケンザキと称する長い棒が先頭になり、獅子(二人で舞う。尾を持つ人はおっぼという)、太鼓、笛一人、鉦一人の六〜七人で回った。この時、要望があった場合には獅子舞も舞ったという。また、新築の家で行われる棟上げ時も悪魔祓いを行ったという。

獅子舞は今から一〇年ほど前まで、かろうじて神舞が舞われていたが、舞う人がいなくなったため、現在は休止している。

獅子頭ならびに獅子舞に関する道具・文書等 かつて道具類はサンペイの家で保管されていたが、その後白山神社で保管するようになった。獅子頭は、人毛のような黒い髪をつけ、左右に大きく張り出した耳が特徴である。眉は渦巻き文様で描かれており、歯の部分、特に下の歯が摩耗しており、下顎の中心に亀裂がある。胴幕には白丸と、花びらのような模様が描かれており、「昭和三十三年一月二日」と白抜きで染められている。この他にも、面が六面、幕二枚、太鼓、笛、錫杖、しゃがまや衣装、「明治四年(か?)七月」と墨書されたケンザキも残されている。また、言立本が二冊ある。一冊目は年代等不明であり九演目の言立が書かれている。しのぶの言立の後には、雪車町村の言立本より写した旨が書かれており、その後丁を新しくして木曾以降の言立が続く。二冊目は昭和二十三年(一九四八)に書かれたもので、八演目の言立が書かれている。二つの言立本には「三番叟」「鳥舞」のみ共通して



鮎瀬獅子頭

言立本 1	言立本 2 (昭和23年8月)
三番叟	三番叟
蕨折り	志賀団七
しのぶ (信夫)	キソウノマイ(木曾?)
木曾	根子切り舞
志賀団七	鳥舞
弁慶	ツルギ舞
地神舞	鳥舞
古弓舞	

おり、後は別の演目が書かれている。鮎瀬ではかつて、「翁」、「三番叟」、「橋引」、「鳥舞」、「神舞」、「やさぎ」、「団七」等が演じられており、これ以外にも言立本があった可能性がある。

(丸谷仁美)

中沢番楽 (由利本荘市西目町西目字上中沢)

由来 天明三年(一七八三)の大飢饉により中沢集落も大きな打撃を受けた。村人の加護を願い意気を上げるため、天明五年頃に岡田金十郎、齋藤小右工門が百宅より伝授を受けたものだと言われている。天保十二年(一八四一)に大山祇神社が再建され、神社を拠点として活動を行ってきたが、昭和五年頃から一時中断しそうになった。この時に青年団が組織され、以後は青年団の活動として継続し、昭和五十二年に中沢番楽会が結成され、活動を行ってきたが、近年、笛吹きがいなくなつたため、番楽が継続できず、休止となつた。なお、『西目町史』には百宅ではなく、猿倉からの流れを汲むとされている。また、明治時代に中沢からさらに埋田、船岡、福田に番楽

が伝えられたという。

行事次第 八月十三日の神社の祭りと二十六日の幕納めで番楽が行われた。番楽の前に獅子舞巡行があり、各家の玄関先で悪魔払いの歯打ちを行った。その後、大山祇神社境内の特設舞台で番楽を二、三番程度舞っていた。休止直前の頃は七、八番程度になっていた。上演演目は次の通り。①神舞、②先番楽、③三番、④鳥舞、⑤四人餅つき、⑥猿番楽、⑦志賀団七、⑧関破り、⑨小弓、⑩熊谷次郎直実、⑪高立(千人切り)、⑫後獅子、⑬一人八島、⑭三人立ち、⑮地神舞、⑯曾我兄弟、⑰山伏、⑱一人餅つき、⑲二人屋島、⑳忍の太郎景時、㉑木曾義仲、㉒若子、㉓橋引、㉔蕨折り、㉕翁、㉖永世万歳、㉗楽がらみ

中沢には「永世万歳」という演目があり、烏帽子、太夫が用いた鼓の胴などが残されている。この万歳は埋田から習ったものとされている。これは番楽に混入した演目で、周辺では秋田万歳が知られている。また、「楽がらみ」は番楽の最後に行われる演目で、地元では「番がらみ」とも呼ばれている。太鼓・笛・鉦による奏楽のみで、拍子は通り・神舞・早節からなり、途中で太鼓の縁や片側だけを打ったり、胴を跨いだり、背中で打ったりというように太鼓の曲打ちを行うというもの。

獅子舞の形態 中沢番楽では、番楽の獅子舞(門獅子)のほか、にかほ市や山形県遊佐町等で行われる御頭舞、御宝頭、十二段の舞などと呼ばれる獅子舞巡行の両方を、番楽の伝承者が担っていた。中沢では集落の全戸(全二八戸)を廻り、玄関先で悪魔払いとして歯打ちを二回する。不幸のあった家には行かず、新築の家では家の周りを三周回ったという。『西目町史』によれば、かつては四月十五日の例祭で使われたのが巡行用の獅子頭で、八月十四日から二十日までは番楽の獅子を持ち、旧西目村中を歩き、門獅子を舞ったのだという。また、昭和三十年代までは西目町内を仁賀保の獅子が廻っていたという話もあり、その様式などを見ても中沢の獅子舞巡行も仁賀

保方面からの伝承によるものと考えられる。中沢の場合、百宅からの伝承とされる祈禱の獅子舞を行う一方で、それとは別に仁賀保方面から御頭舞も伝播したというように、西から獅子舞、南から御頭舞という二つの系統の違う芸能が伝わり、それが共存した特異な地域だと考えられる。同様に西目町の田高番楽にも番楽の獅子舞と御頭舞の両方が伝わっていることが今回の調査でわかった。

(註)

(1) 佐々木孝一郎『西目村の話』明玄書房、一九七〇年六月。

(神田竜浩)

第四節 概況・にかほ市域の消滅した番楽

(一) 本海流水岡野獅子舞

平成二十八年十二月八日に、舞い手であり歌も経験された佐々木誠一氏(昭和八年一月十日生まれ、八三歳)より聞き取り調査を行った。

(1) 名称 本海流水岡野獅子舞(集落名は「水岡野村」であった。)

(2) 所在地 秋田県にかほ市象潟町大字横岡字水岡

水岡は最盛期二二戸あったが、現在は一六戸約七〇名が居住している地区である。近年は周辺地区も編入されて三〇戸になっている。

(3) 保存会名 「水岡番楽保存会」と称したが、現在は「休会」扱いになっている。

(4) 番楽の実施日(年五回) および実施場所

① 「神おろし」は八月一日で庵寺の庭先で行った。

② 「盆公演」は八月十三日、十四日、二十日(または二十六日)で希望する各家庭の庭先で行った。

③ 「二百十日」は庵寺の庭先で行った。

④ 「神送り」は八月末の適当な時期で、希望する各家庭の庭先か水岡自治会館で行った。

(5) 休止した時期

平成十年頃から行われなくなっている。

(6) 由来・沿革・経過

当地は、藩政時代は矢島の生駒藩領になっており、矢島藩名主が横岡に住し組頭として水岡の佐々木与左衛門が任命されていた。そういう関わりから、矢島周辺の本海流番楽の流れを組む獅子舞芸能が水岡に伝播し定着したものとされている。テンポの早い三拍子といわれる。昭和四十七年六月水岡番楽保存会を結成し、成人男子約二〇名で組織した。昭和六十三年象潟町指定文化財となっている。『象潟の文化』の「鳥海山小滝番楽考」の中に、「其当時水岡二ハ獅子舞ナシ 後ニ冬師村ヨリ習ヒタリ」(昭和十年十一月「小滝番楽の歴史」と記載されている。この頃は、水岡番楽は中断していたことが考えられるが、あるいは、「獅子舞」とは演目の獅子舞をさすのかも知れない。近隣の冬師番楽と伊勢居地番楽とは兄弟獅子といわれるほど番楽内容は似通っていたようである。かつては水岡には依頼の声がかかり、多くの招聘公演で謝礼金などをいただく機会に恵まれ、保存会の財源にはあまり苦労はなかったという。水岡の成人男子は学校を卒業すれば全員が獅子舞に加わることになっていた。戦時中は女子にも加わってもらい継承し続けた。近年は

少子化で男子が少なくなったので女子も加入していた。水岡では番楽を維持するには、三〇人くらいの会員で十分な体制といえ、二〇人ではぎりぎり維持できる状況であった。それ以下の人数では苦しい状態であり、休止の頃はそういう厳しい状況にあった。それでも子供たちの「三人立」や「二人餅搗き」などではできた。

(7) かつて行われていた演目

① 神舞 ② 番楽 ③ 翁 ④ 吉田 ⑤ 熊谷 ⑥ 三人立 ⑦ 源頼光 ⑧ 一人餅搗き ⑨ 松迎え ⑩ 二人餅搗き ⑪ ゆらゆら ⑫ 田村將軍 ⑬ みかぐら ⑭ さつま(さつま坊) ⑮ 曾我兄弟 ⑯ どや(鍋いかけ) ⑰ 景清 ⑱ たろたろ ⑲ おかし ⑳ 空白 ㉑ やさぎ獅子 ㉒ 蕨折 ㉓ 鳥舞

以上は、佐々木氏が知り得る水岡野獅子舞の最盛期頃の演目数である。佐々木氏の現役時代は一〇演目くらい行っていたというが、時代とともにしだいに四〜五演目へと減少していった。

(8) 現況

保存会はずっと「休会」状態で上演はまったく行われていない状況である。

(9) 衣裳・楽器等の保存状況

衣裳や楽器(太鼓一・笛一・鉦ジャガー)、面(六体)は水岡自治会館に保存されており、その状況は良好である。獅子頭も残されており「神舞」と「やさぎ獅子」のときに使用した。黒漆塗りでやや平べったく髪の毛は麻である。当地で盛んな初午で使用する獅子頭とは別のものである。

(10) 保存記録資料等

「言立本」は手元には残されておらず、誰かが持っているかどうか不明で

ある。

(11) 今後の継承の可能性

記録映像は残されておらず、このままでは復活はかなり厳しい状況にある。もう一度水岡野獅子舞をやってみようとする集落の人々、特に若者がいればいいのであるが、今のところそういう気運はない。現段階であれば、近隣の冬師番楽や伊勢居地番楽を見ながらも復元することはまったく不可能とはいえない。たとえば、地域おこし協力隊など外部の若い力が結集でき、地元の方々と一緒になって復活する試みもあるかも知れない。

(参考資料)

- (1) 『象潟町史 資料編Ⅱ』象潟町、一九九六年九月、901頁。
 (2) 『象潟町史 資料編Ⅰ』象潟町、一九九八年三月、923頁。
 (3) 『象潟の史跡ガイドブック』象潟町、一九八九年三月、54頁。

(二) 本郷獅子舞番楽

平成三十年一月二十二日に、修験寺院「威徳院」の現当主である金初子氏(昭和七年生まれ、八六歳)宅で聞き取り調査を行った。

(1) 番楽の状況

金初子氏によると、本郷獅子舞番楽は夫であった故金啓一郎氏(大正十四年生まれ)が幼少の頃に舞われていたのではないかと言う。啓太郎氏は見えて知っていたふしがあるからである。また啓太郎氏が健在の頃に、番楽を舞ったことのある人、あるいは見て知っていた人が、番楽を思い出して身振り手振りでその一部を宴会の席で披露していたことがあると初子氏は証言している。このようなことを踏まえれば、本郷獅子舞番楽は先の大戦以前ま

では舞われていたのではないかと推測される。現在は番楽を知る人はまったく存在しない。

(2) 獅子頭と御宝頭の舞

番楽獅子舞とは直接関係しないが、金氏の自宅には、「御宝頭の舞」で使用したとされる獅子頭が保存されている。この獅子舞は小滝地区の御宝頭の舞の獅子頭と形態が極めて類似しており、小滝と当獅子頭は「兄弟」だともいわれているという。頭髮は白色の和紙で作られており、小滝同様に雄獅子とされている。口髭も左右八個の金色の巻毛がほどこされている点も小滝とまったく同じである。上顎内部には「塗直 寄附人 初掌 金賢忠 明治二十年 亥三月五日」と墨書されているから、明治時代半ばに塗り直しされたものであることがわかり、頭部表面黒色の漆の輝きは失われていない。この御宝頭の舞は正月一日と籠田神社の風祭り九月一日（または八月三十一日）の際に本郷地区はもちろん、上郷・上浜地区の家々を舞い巡ったという。なお、本郷地区にこの御宝頭の獅子舞が存在したことは、本郷獅子舞番楽で獅子舞が演じられたかどうかを考える際の重要なカギとなる。ちなみに、集落に御宝頭の獅子舞をもつ小滝番楽では獅子舞は演じられない。

(3) 黒色と白色の尉面

黒式尉面一点と白式尉面一点は、それぞれ薄葉紙に包装されて松と梅が描かれた立派な黒漆の箱に丁寧に納められている。木製の柄と五つの金輪が付いた錫杖一点も薄葉紙に包装されて保管されている。いずれも使い古されているものの、保存状況は良好である。

黒白の尉面二点と錫杖一点は、威徳院（現当主 金初子氏）に保管されている。そもそも番楽は、修験者との関わり合いが深い神楽芸能であることから、小滝修験の配下にあった威徳院が何らかのかたちで本郷獅子舞番楽に関

わり、廃止後も一部の道具類が保管されることとなったのであろう。黒式尉面と白式尉面内側に銘はないが、番楽で使用されたとすれば、翁舞か三番叟あるいは松迎えなどの演目で使用された可能性が高いといえる。また錫杖の柄（木製）部分には「天喜 申午」と彫られている。天喜年間とは、西暦一〇五三年～一〇五八年であり、その間で干支「申午」に当たるのは一〇五四年である。平安時代末期のこの時期は、いわゆる前九年の役のただ中にある。そういう戦乱事情はともかく、この錫杖は番楽に使用された道具としては古すぎるのではなからうか。何よりも番楽そのものがいまだ成立していない時期といえる。これが番楽に使用されたのであれば、「天喜 申午」はのちに刻まれたものと考えるのが妥当であろう。

（参考資料）

(1) 『象潟町史 資料編Ⅰ』象潟町、一九九八年三月、896頁。

(2) 企画展資料『揚げば島海山 霊峰島海山の記憶をたどる』象潟郷土資料館、二〇一四年。

(三) 上小国番楽

聞き取りに応じることができない人はいない状況である。上小国番楽について、記憶に残っている人はほとんどなく、その存在すら忘れられているのが現状といえよう。幸いに『小国の民俗』という調査報告書が残されている。それによると、小国番楽は昭和に入ると間もなく衰退し、やがて途絶えた。番楽は九月のはじめ、二十十日頃に、農作物に対する大風除け、災害除け、豊穰を祈願する芸能だった。集落の大沢神社で演じられており、舞台は社務所を使用していた。

現在は、番楽の衣裳・道具の大部分は残っていないが、獅子頭と面（七面）は存在している。集落の区長によれば獅子頭は大沢神社内に納められているとのことであるが、七面はにかほ市の仁賀保勤労青少年ホーム（公益財団法人

人斎藤宇一郎記念会)に展示されている。七面の中の一つに女面があるが、その裏に「姉子」の文字の墨跡がかすかに認められる。横岡番楽で現在も行われている「一人餅搗き」の演目には、「アネコ」と言われる女装の道化が面を被って登場する。他方、伊勢居地番楽では、「蕨折り」に登場する女性は、言立本には「あねこ」と記されている。小国番楽の面「姉子」ははたしてどんな役柄に用いられたものだったのか。

なお、前記『小国の民俗』には、上小国番楽は近郊の釜ヶ台・伊勢居地・冬師の番楽とは、おおよそ近い内容であつたらしいと記している。

(参考資料)

一九八七年度調査報告『小国の民俗 秋田県由利郡仁賀保町小国・上小国町』早稲田大学日本民俗研究会、一九八七年。

(四) 大須郷獅子舞

聞き取りに応じることが出来る人はいない状況である。平成八年十二月発刊の『郷土のあゆみ』をもとに概略を記すことにする。

大須郷獅子舞は、昭和十五年に獅子舞を復活することができ、その秋に八王子神社に奉納した。その時の演目は、薙刀舞、御神楽、弓の舞、金房、田村、曾我兄弟、酒呑童子、堀川、松迎、餅搗き舞の十演目であつた。練習に入る前には、家元に師匠、囃子手、舞い手が集まり、神に三番叟の面を供え膳とお神酒を供えて笛や太鼓、神歌を奏し、三番叟よしなどの舞を舞って「神おろし」が行われた。その後お盆過ぎからはじめて番楽の練習に入った。秋が八王子神社への奉納公演であつた。その年の舞が終わると「神納め」が行われ、家元で神おろしと同じ儀礼が行われた。戦時中は一時途絶えたが、昭和二十三年に再興され翌年の公民館落成記念では獅子舞が舞われた。その後担い手は高齢化し後継者もなくなつて、今では大須郷獅子舞は復活が不可能

な状態となっている。

前記『郷土のあゆみ』には、「昭和二十二年十一月一日『獅子舞神歌』昭和六十二年十月書改」が掲載されており、大須郷獅子舞がもつ一演目の神歌すべてが詳細に記されていて貴重である。神歌は紙数上記載できないので、その演目名のみを記す。

- ① 番楽 ② 三番叟よしなど ③ 御神楽 ④ 弓の舞 ⑤ 金房(草) ⑥ 田村
- ⑦ 曾我兄弟 ⑧ 酒呑童子 ⑨ 堀川 ⑩ 松迎 ⑪ 鳥ら

(参考資料)

『郷土のあゆみ』大須郷沿革誌編纂委員会、一九九六年十二月、138～150頁。

(五) 畑番楽

資料が見当たらず、聞き取りも出来ない状況にあつて、現段階では記載不能である。

(菊地和博)

第五節 荒沢獅子舞(荒沢番楽)

鳥海町、矢島町の村々に番楽を伝授したという本海坊伝承は、矢島荒沢が本海坊終焉の地であると伝える。荒沢は鳥海山麓の番楽の拠点の一つであり、「荒沢獅子舞」と呼ばれていた。本海系番楽では獅子舞番楽のことを、一般的に「獅子舞」と総称してきた。荒沢の獅子(写真



写真1 獅子頭

1)は「八幡権現」と呼ばれ、領主生駒氏の館に参向した御用獅子三頭のうちの御用頭だったといわれる¹⁾。前頭部に金属で作った、生駒氏の家紋である半車の紋章を戴く(写真2)。

荒沢の針ヶ岡に「獅子舞翁碑」が置かれている(写真3)。石碑正面中央に「獅子舞翁碑」と刻み、その右側に「俗名金子佐治工門 長松舎鶴翁壽栄居士」、左側に「矢島町荒沢村 仁賀保

伊勢居地村 本莊新屋敷村」と三ヶ村を並列し、その下に「門弟中」、最後に「金嶺書」と刻む。金子佐治工門は、後述する荒沢の「奉祭本海流系譜」(明治二年)に名前を連ねる荒沢獅子舞連中の一人、「針ヶ岡 金子佐治右工門」と同じ人

で、「長松舎鶴翁壽栄居士」は金子佐治右工門の戒名であろう。「わが町の獅子神楽」によると、佐治工門は明治二十七年に七七歳で亡くなったそうであるから、建立時期は明治二十七年以降となるが、おそらく没後間もない時期に金子佐治工門という荒沢獅子舞の師匠を顕彰するために、荒沢、伊勢居地、新屋敷の門弟が建立したもののようである。

生駒氏のお膝元にあった荒沢獅子舞は江戸時代後期から明治時代にかけて、矢島の金比羅神社の祭礼に頻繁に出かけているが²⁾、昭和十年から二十年にかけての頃に休止・途絶の道を通ったようである。昭和八年十二月二十九日の午後、本田安次氏が当時の佐藤宇之助氏の家で荒沢獅子舞を実見している。その時の演目は獅子舞のほか「翁」「三番叟」「年寿」「蔽折」「きざらぎ」「唐臼」であった。本田氏が「都合で」「先番楽」も「鳥舞」も「扇的的」



写真2 半車の紋章



写真3 獅子舞翁碑

も出なかつた」と記していることから、当時、これら三番の演目もできたのであるが、すでに「こゝ、三十年來、荒澤に舞ふ人が少なくなり、宿をするものがなくなつて、今は字針ヶ岡に宿元が固定してゐる」という状態であった³⁾。

そのような講中の状況に加えて、この時は本田氏の調査に合わせて特別に上演した番楽であったから、都合によって上演演目も限られたのであろう。当時「年寿」「蔽折」といった女舞もできたこと、「唐臼」(空白舞)を最後に行つた様子などが、本田氏の記録によってわかる。「空白舞」は一連の番楽の最後の演目とするところが多く、荒沢の影響を受けた屋敷番楽、伊勢居地番楽ほか各所にある。荒沢の二冊の言立本にも「空白舞」の名称は記載されており、同所における「空白舞」の存在は本田氏の記述によってのみ知られる。

荒沢獅子舞はいつ頃途絶えたのであろうか。筆者が最初に調査に行つた昭和五十七年の時点でも、もう全く不明の状況であった。上記本田氏の記録によつて、昭和八年頃には獅子舞ほか何番もの番楽を伝えていたことがわかるが、この頃には番楽の伝承がだいぶ衰退していたためであろう、番楽を見た本田氏の感想からは、予測していたのとは違う芸態であつた失望感が読みとれる。

矢島神社祭礼奉納の獅子舞については、「御祭典記録」に、明治二十七年から昭和四十五年までの分が記録されている。ただし、これには記録の欠けている年、講中の名前が入っていない年もある。昭和三十四年以降は獅子舞の奉納は中止となり、昭和四十五年の坂之下講中は県指定を記念しての奉納であった⁴⁾。明治二十七年以降、荒沢講中の名が多くみられる。針ヶ岡講中の名もあるが、後述するように針ヶ岡も荒沢講中の内である。明治、大正期の記録には講中は荒沢獅子舞以外は記されておらず、講中名の記されていない獅子舞もほとんどは荒沢獅子舞であつたように推察される。荒沢講中は昭和

に入ってから、昭和四年を除き連続して記されるが、それも昭和十一年までのことである。以降荒沢の名称は途切れ、かわりに濁川、坂之下、堤鍋などが獅子舞奉納を行っている。

『わが町の獅子神楽』は「荒沢獅子舞の消滅はこの神社記録から見ると、昭和十年代初頭となるのではあるまいか」と記す。荒沢の獅子頭の胴幕に「昭和拾年正月」とあり、この年に胴幕を新調していること、その二年前に本田安次氏が獅子舞番楽を見ていることから、全く途絶えるのはもう少し後のことかも知れないが、おそらくは講中の人員不足によって昭和十年代初頭に急速に衰退し、その後休止、途絶に至ったようである。終戦時にはもう全く消滅状態となっていたように思われる。

ただし、荒沢講中の内、針ヶ岡講中は獅子舞番楽はやらなくなっても、講中そのものは戦後のある時期まで存続した。上針ヶ岡の佐藤洋一家では、洋一氏が（昭和二十三年生）が小学校入学前から高学年になるまで、一月二十日に針ヶ岡講中の人々が佐藤家に集まって「八幡様の祭り」を行っていたという。この日は出店も出たというから、講中以外にも大勢が集まったようである。その話を裏付ける資料が残っている。昭和三十二年から三十五年一月二十日の「八幡様の祭典日」「八幡神社費用記」などと題した記録には講中五人が各自百円程度出し合って、豆腐、魚、ローソクなどを購入している。佐藤家に残されている「奉斎八幡大神霊符」という御札は、この時に配られたものと思われる。平成七年に聞いた洋一氏の父、長一氏（昭和四年生）の話では、一月二十日には矢越八幡神社の宮司が来て祭事を執り行なっているということであったから、祭事自体は平成に入ってからも続いていたようである。

荒沢獅子舞については、いまは本田氏の記述と獅子頭、言立本ほか残された道具類からかつての様相を推量する以外方法はない。幸いにも佐藤洋一家で、洋一氏の曾祖父、佐藤家六代目の米吉氏の時代から獅子頭、番楽面一

面（写真4）、錫杖、太鼓・鉦、など道具類一式（写真5・

6）および言立本二冊が保管されてきている。その昔は年番の宿ごとに獅子頭、道具類を預かっていたが、佐藤家で預かるこ

とになったのは、講中の衰退と関連してのことであろう。以後、佐藤家では獅子家が家を守ってくれるからと、床の間に注連縄を張り、五本の御幣を立て、背後に赤い幕を垂らした祭壇に家の氏神として獅子を祀っている（奉祭本海流系譜）および言立本については「資料編」に掲載）。

（註）

- （1）本田安次著作集『日本の伝統芸能』第五巻、錦正社、一九九四年、533頁。
- （2）『わが町の獅子神楽』矢島町教育委員会、二〇〇四年三月、52頁。
- （3）注（1）、534、550頁。
- （4）注（2）、53頁。



写真4 番楽面

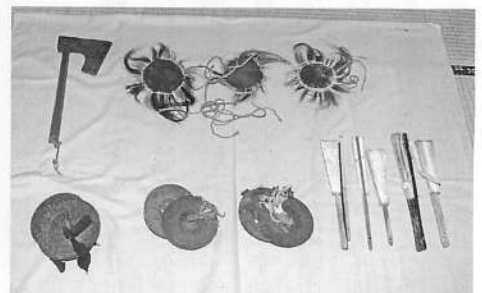


写真5 道具類

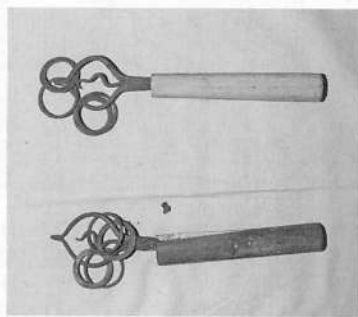


写真6 錫杖

（高山 茂）

コラム 本海獅子舞番楽の獅子頭の造形

世の中にはさまざまな獅子舞が存在しております。丸味を帯びた達磨獅子から角ばっている重箱獅子など、重さも2kg前後から4kgを超えるものまであります。

ここでは、国指定（平成二十三年三月九日・第四四〇号）を受けました鳥海の本海獅子舞番楽一三講中の獅子頭をベースに、昭和三十年代から各講中の明治、大正生まれの師匠達からの話も含めて記述いたします。

本海獅子舞番楽では獅子舞が絶対条件なので、各講中では獅子頭を大事にし、現役の他に隠居獅子といわれる先代、先々代の獅子頭も持っております。また過去に個人的に獅子頭を寄進や奉納した家では、隠居を機会に我が家の守り神として引きとり祭っている方もおります。

獅子頭はお獅子様と呼ばれておりますが、講中では「八幡様」として崇めているところも多く、更には自分の「親神」としている講中もおります。昔から獅子頭は、身近にしても触れられる神として信仰されておりますが、お獅子様に係わる日は四足（獣）、二足（鳥）は御法度とされており、それを今も守っている講中もあります。

（二）獅子頭の構造

頭は頭部と下顎部の二材からなり、それを連結して出来ており共木（一本の木）で作られており、その材料は良く乾燥した科の木（俗名ウマダ）、栃（白身）、柳、桂などですが、松、桐などでも作られております。

獅子頭は激しく振るために粘りのある丈夫で軽い木が一番良いのですが、今は大木もなく材料難の時代。大型の頭は無理のようです。頭の製作は地元

の大工さんや手利きの素人の手彫りで作られて来っており、その塗装は湯沢市川連での漆仕上げで出来ているのが多いようです。

獅子頭は上部と下部を組み合わせておりますが、その組合せが二通りあります（図1）。一つは一般的な「頭部連結型」で、頭の後部が歯並びよりも下に張り出しており、そこから連結棒を差し込み下顎の少し盛り上がった所とつながっております。もう一つは「下顎連結型」で、下顎の後部の両側が大きく盛り上がった所、頭部の方は歯並びと同じ高さで切れているので、頭部からの連結棒を下顎の盛り上がった所で受ける仕組みになっております。

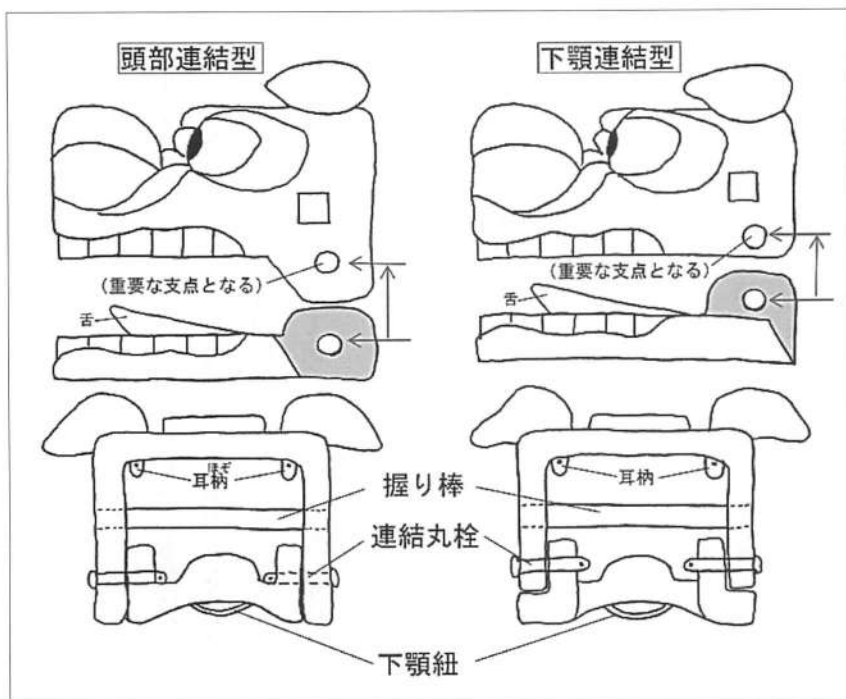


図1 獅子頭の構造

※連結棒（丸栓）は歯ぐいの支点となる重要な役目をもっており、丈夫なイタヤカエデが使われております。

※社殿に安置している頭は別として、振り獅子の場合は時代と共に少し変わって来ております。文化財としての認識があまりなかった明治、大正、昭和の前半にかけては、その頭は重いか大きすぎるなどと、新しく作るときは振りやすいように改良されているようです。

①目：「獅子の八方にらみ」と言われるくらい目には威厳があります。楕円形の大きな眼球に丸い瞳が入っております。その眼球が金箔のものが大部分ですが、真鍮（黄銅）を使っている獅子もあります（図2）。

※八方とは四方と四隅のこと。

②鼻：「獅子鼻」はその存在感がありますが、その鼻孔は約3cm位で歯ぐいの音が外に良く抜ける仕組みになっております。

③耳：信者の願い事を聞く大事な獅子の耳ですが、「立ち耳」と「垂れ耳」がございます。

どちらも柄（ぼぞ）つきで頭部に固定されているため大きな耳ほど怪我をする。つまり欠けてしまうこともあります。そこで中には麻縄で動きやすいように結びつけている獅子もあります。

④鏡：獅子頭の頭頂部

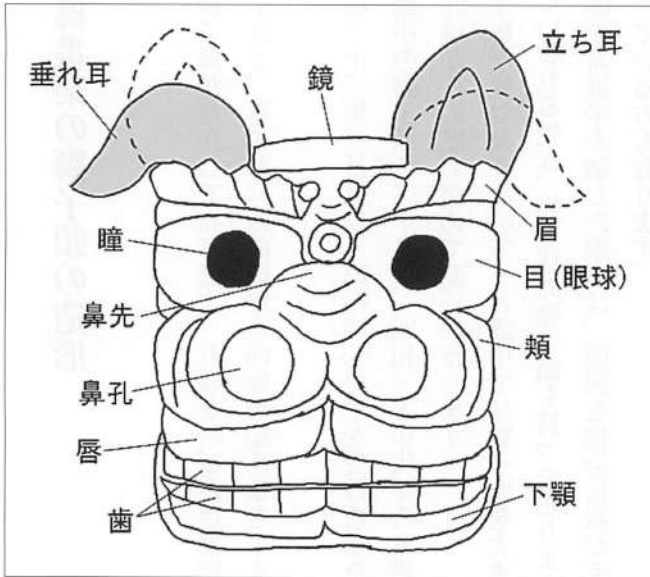


図2 獅子頭図

に直径一〇cm前後の青銅の鏡がのついているものもありますが、それに変わり丸く浮き彫りにしているものもあります。

※指定一三講中の獅子の中には角のある獅子はありません。（現役の獅子の場合）

⑤歯：歯は上歯と下歯が同じように並んでいます。その本数は色々です。上、下とも一三本〜二〇本位ですが、その内前歯が真中の一本から始まり、奇数の五本、七本のものと同前歯左右対称の六本、八本ものがあります。奥歯は犬歯のあるのは少なく、間引きをして歯ぐいの音がこもらず抜けやすいように作られているものもあります。

⑥髪：頭部には髪と称する中四cm位で長さが三〇cm前後のさまざまな色や柄の布を付けています。これは面（もて）がくしと言われており、普段は獅子の顔を半かくしにして神秘さを保つためのものであり、また振った時は躍動感を表すなど重要な役目をもっております。

願いごとをする人が自分の名前を書いて奉納されたものもあります。またお守り袋にはお獅子さまからとった髪を小さくして入れております。

※昔のお獅子さまの髪は麻糸が主であったようです。それは各農家で麻を栽培し、その中皮の繊維でつくられた麻糸が使われており、その頃は秋になると「糸もらい獅子」といって何軒かで獅子を振って麻糸をもらい、髪のほか太鼓の紐なども手作りして使っております。

⑦寸法：獅子頭の寸法は一定しておりませんが、振り獅子の場合、大旨頭の中が約二二cm〜二六cm。長さ（奥行）約二八cm〜三二cm。高さ（耳を除く）約一五cm〜二二cm位です。重さについては裸獅子で約二・五kg〜三kg。それに髪が一kg位あります。約一貫目位の重さの獅子頭を左手で支えて振るわけですから重労働になります。

（二）獅子の御幕（胴幕）

二人立ちの獅子にはかなり大きな円錐形の御幕が頭の首周りに細い麻紐で取り付けられております。幕の柄や寸法はそれぞれ違いますが（図3）、共通

しているのが背側は半小判型の鱗で前の腹側は横縞が多く、色は赤、黒(紺)、白、青が主であります(図4)。

幕の生地は昔から丈夫な天竺木綿が使われております。またあまり厚手のものだと獅子をかぶった時に外が見えにくいので好ましくありません。

※昔からお盆前の八月七日は幕洗いの日と定められており、その日は講中総出で働きますが、頭から幕をはずして川で洗うことや、色々の衣装の虫干しから道具の修理など、手入れを怠ることなく頑張っております。今は法体の滝で洗っている講中もおります。

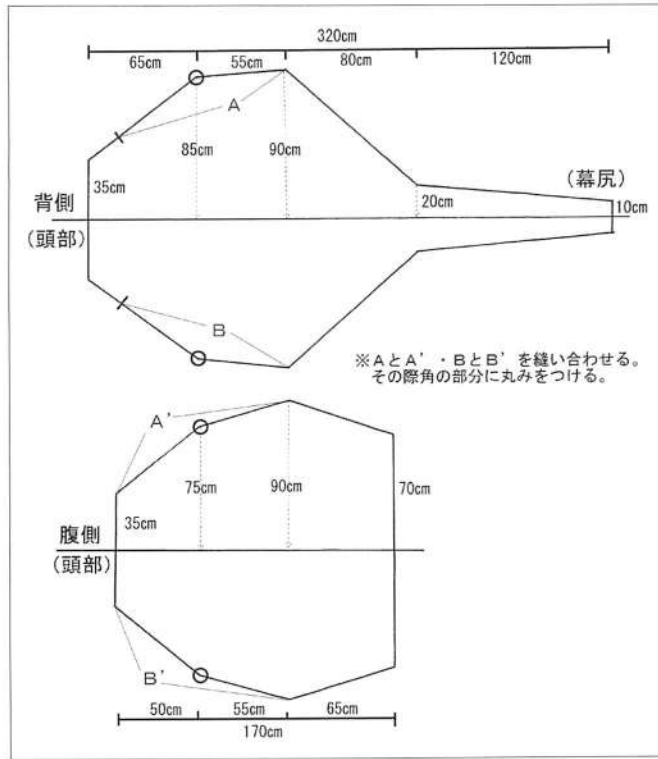


図3 獅子御幕の寸法例 (本海獅子舞番楽平根講中)

(二) 拍子の楽器

獅子舞番楽の拍子は太鼓(胴ともいう)と笛と鉦の三つで拍子をとります。

太鼓は長胴縮太鼓で、丸型の皮の経が約40cm前後で胴の長さは四五cm位が一般的です。皮は昔は馬皮もあったようですが、今は牛皮で、それも仔牛の皮が丈夫だそうです。笛は篠竹で作られた横笛で、指孔は七穴で一穴は塞い

で使っております。ベテランになりますと自作の笛を使っている人もおりますが、大変難しい事の様です。鉦は鉄の铸件で、手の平サイズ位なのでテビラガネとも呼ばれております。

※太鼓の胴は丸太のくり貫き胴と桶胴が主ですが、最近では椀胴などの重いものより少しでも軽いものを求める傾向にあります。

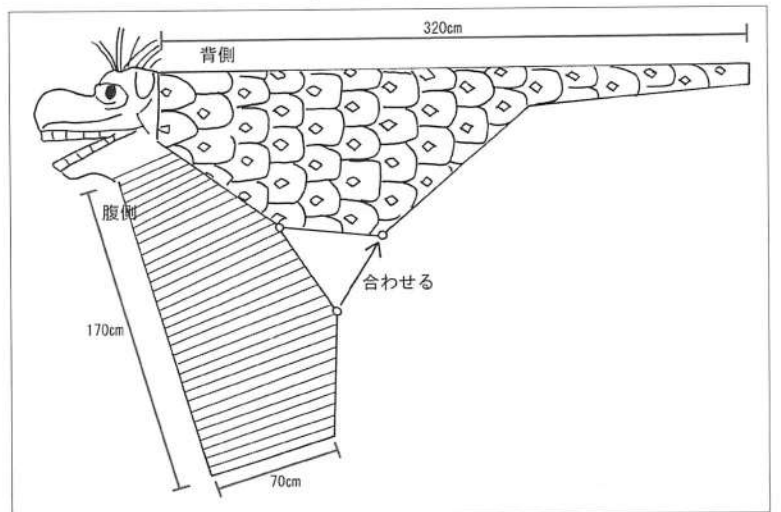


図4 獅子頭に御幕をつける

(四) 獅子振り (二人立ちの祓い獅子)

獅子を振る人を舞手、背後で獅子の幕を捌く人を後幕とりと呼びますが、これはどちらも重要な役目であります。二人とも獅子舞に習熟して息が合わないとうまく舞えないのであります。各講中によって違いがありますが、基本的なことについてふれたいと思います。

① 振り始め

舞手は後幕とりから獅子を受けとるが、先ず最初に獅子頭の下顎の右側を左手でつかみ、右手の親指を頭の右鼻孔に入れ、鼻みねをしっかりとつかみ、歯ぐきを左から振り始めます。一舞のあと左手を幕の中に入れ、頭の中に

水平についている握り棒を握り、右手で幕を捌き、一舞の後右手で幕をかぶり、その手で素早く下顎の紐を手の平を上にしてしつかり握り歯ぐいをして本番に入ります。

※獅子を生きたと振るには、左手の手首を上下して頭をあごを引き、髪に躍動感を与える
と獅子が生きて来る。右手での下顎の操作主体の歯ぐいは獅子が生きていないとの事（古老の忠告）。

②獅子頭が主体の舞

本海流獅子舞秘伝之巻によると、獅子舞番数の事、門獅子より地舞、神宮獅子まで第七番とあるように、先ず、門獅子、地舞（下舞）、祓い獅子、神舞（祈祷獅子）、引い獅子、やさぎ獅子、神宮獅子（柱がらみ）となっており、舞う時は獅子舞の掛け唄がかかります。

このほかに獅子頭が登場するのは、虫ぼい獅子、金巻などがあります。

③本海獅子舞の三要素

本海獅子舞にはどの舞にも共通する大切な三つの条件があつて、これを「獅子舞の三要素」としております。

天地和合……………獅子頭の上顎と下顎を強く打ち鳴らす「歯ぐい」のことで、天の神、地の神、上の人も下の人も共に和合するとの願いも込められているとの事。

龍門の振り返し……………獅子舞の中で最も激しい場面で、連続して獅子頭を両手で左右左と振り返す所作で、獅子の威厳を表しているとの事。

三条のみ腰……………獅子振りも動から静に移り、幕にからまり獅子頭を頭

上高くかざし腰をすえて上体を前に倒して起こす所作などで、これは加護する村々を見わたし守るためのしぐさとの事。

※龍門とは、中国の黄河の中流にある険しい滝で魚などがその滝を昇りきると龍になると伝えられている（参考）。

※三条とは、江戸時代には京都第一の中心地として栄えた三条通り、三条大橋附近（参考）。

※三要素については、昭和五十年代に島海町史編纂に当たり、獅子舞番楽や猿倉人形芝居などの執筆担当となり、師匠達から聞きとり調査の中で、当時の下百宅講中代表で後に伝承者協会の初代会長を務められた佐藤善雄氏（大正十二年〜平成十九年）が、「本海舞」のことや獅子舞に三つの要素が入っている旨等語ってくださいました。以来本海獅子舞のキャッチフレーズとしても使っております。

追記

獅子舞番楽に係わる道具などは、無形の文化財だけに休むとなくなることもあるので大事にし、また更新・複製にあたっては古い物を模して作り、不用となった古い方も大事にすべきです。それは時代を証明する唯一の文化財であるからです。また面は決して塗り直しなどをしないことです。むしろ新しい面を作り、古い面は文化財として大切にしたいものです。

本海獅子舞番楽では、獅子舞と共に代々伝わる年中行事を大事にするよう心がけて頑張っております。

（松田 訓）